新潟県立歴史博物館評価委員会

令和４年度における
館の自己点検に対する
二次点検評価報告書

令和５年８月

活　動　評　価　表　（総括）

博物館の基本理念

○　県民の営みの証である歴史資料を記録・整理・保存し、新たな歴史像※を県民とともに創造していきます。
○　人々と連携しながら、現在から未来へ、地域から世界へと県の価値を発信していくことを使命とします。

こうした活動を通して
『より県民に愛され、利用され、″にぎわいのある博物館″』を実現します。

※「新たな歴史像の創造」
博物館の活動を通じて再発見される新潟県の価値や魅力が、新潟県の歴史についての新鮮なイメージとして、県民の皆さん一人一人の中で実を結んでいくこと

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○［評価指標］利用者数　（単位：人）

	令和３年度	令和４年度	
	実績	目標	実績
①　利用者総数	（単年）　40,472	増加させる	46,649
②　観覧者数	（単年）　35,211		39,836

＊観覧者数の集計方法を変更（令和２年度から企画展観覧者の常設展観覧料免除を廃止）
令和２年度から企画展観覧者が常設展観覧料を支払い常設展も観覧→２名で計上

○［評価指標］満足度

	令和３年度	令和４年度	
	実績	目標	実績
①　来館者満足度	95%	維持・向上させる	95%
②　企画展	91%		91%
③　講座等 講座・講演会 体験コーナー	 99% 100%		 96% 100%
④　来館者対応	-%		100%

(1)**収集保管**　収蔵資料データ整理の推進、収蔵庫の良好な保存環境の継続
(2)**展示**　［常設展］展示環境の維持、ワンポイント解説ゲスト解説の実施
［企画展］有料展覧会２回（「浮世絵に見る江戸美人のよそおい」、「生業絵巻尽」）
［テーマ展］「重要文化財　村尻遺跡出土品」「大河津分水と信濃川の治水」

(3)**調査研究**　外部研究費６件（ほかに研究分担者としての取得６件）
(4)**教育普及**　館内講座・出前講座の継続、体験活動の新プログラム２件導入、教育機関への周知活動の継続、館内ボランティアの人数増
(5)**連携**　地域史研究ネットワーク、友の会事業の着実な実施など
(6)**情報発信**　新聞雑誌等への露出増加、ホームページ及びSNS（フェイスブック、ツイッター、インスタグラム）による情報発信の継続
(7)**管理運営**　博物館運営方針に基づいた検証・評価の実施

分 析	(1) 利用者総数、観覧者数 ★観覧者数　常設展 R3：27,039 人→R4：30,904 人 企画展 R3：　8,172 人→R4：　8,932 人 (2) 学校団体来館者数 、Ｒ４年度は約 9,000 人と増加傾向が続いた（Ｒ元:約 7,500 人、Ｒ２：約 6,200 人、Ｒ３：約 8,000 人）。 (3)新型コロナ対策として、外部講師による企画展記念講演会をリモートで開催した。館内講座、体験コーナーなどの参加人数等の制限をおこなった。 (4)満足度の評価指標は、各項目とも昨年並みを維持している。 (5)新型コロナ禍にあって、来館者数や館の活動に大きな影響があった中、外部研究費（科研費）取得件数の増、SNS フォロワーの着実な増加などが一定の成果として挙げられる。
課 題	(1)　企画展の展示方法・テーマ設定のさらなる工夫 (2)　具体的な集客に向けた広報等への新たな取組 (3)　調査研究活動の充実と県民還元の推進 (4)　支援団体・協力者との一層の連携強化
取組に対する自己評価	評価できる　[やや評価できる]　やや評価できない　評価できない　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価	
取組に対する全体的評価	[評価できる]　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・企画展開催費をはじめとする予算削減や事務職員の削減など、厳しい環境を強いられる中、各項目において知恵と工夫で全般的によい成果を上げている。 ・企画展予算が以前の 4 回分から 2 回分へと減少し、結果として館蔵品や近隣施設との連携による「テーマ展示」を企画展示室で開催して減少分を補っている。しかし限られた人員でできることには限界があり、いつまでこの状態を維持できるのか心配もある。 ・コロナ禍も落ち着き、これまで制限していた従来の多くの活動も復活した。利用者数も昨年度よりは増加した。しかしながら懸念されるのは、令和 2 年度の観覧料徴収方法の変更以来、入館者が常設展か企画展のどちらかしか見ない現象が常態化しつつあることである。観覧料収入としては導入以前とほぼ同じというものの、とりわけ企画展の観覧者は 10%ほど落ち込んだ。本県の歴史や民俗を伝える活動がなされているにもかかわらず、県民の目に触れる機会が減ったことは残念である。SNS の発信など、県民との接点を増やす努力がなされているだけに、観覧料徴収方法の変更に伴って、展示という博物館機能の中でも重要な活動が益々県民から遠ざかる現状は憂慮される。 ・他方、館側には県民への更なる歩み寄りもあってよいかと思われる。もちろん単なる迎合はよくないが、本県の隠れた歴史や魅力を発掘し、それを平易な形で提示する努力を続けることによって、当館の活動の意義が県民にさらに伝わるのではないか。 ・最後に、展示や講座などに対する現在のアンケート調査の方法については、再考の余地があるのではという意見が複数の評価委員から出されていることを付言しておきたい。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	収集・保管	学芸課
取組方針	・本県の歴史を明らかにするために欠かすことのできない資料の収集・整理に努めるとともに、そのデータ化を推し進める。 ・良好な資料保存環境を維持する。	
主な実現方策	・資料の収集の継続と収集資料の整理を推進する。 ・ＩＰＭによる環境管理を継続する。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］収蔵資料目録の刊行準備

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
１目録	1	1

○　［評価指標］データベース公開数

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
204	300 件以上	112 件

収集

(1) **資料寄贈**　　６件

(2) **収蔵資料破損**　なし

(3) **収蔵品整理作業**　継続

保管

(1) **文化財害虫モニタリング測定**　月１回

(2) **殺・防虫消毒**　展示室殺虫消毒　１回、館内殺虫消毒　１回、館外防虫施工　２回、燻蒸室内燻蒸　４回

(3) **収蔵庫温湿度管理**　通年

(4) **空気環境管理**　カビ等浮遊菌調査　３回、イオンクロマトグラフ空気物質測定　１回

(5) **収蔵庫定期清掃及び資料点検**　１回

(6) **収蔵庫定期点検**　月１回

(7) **ＩＰＭ研修**　４回

(8) **保管環境研修会参加**　保存担当学芸員研修（上級）、文化財虫菌害防除作業に関する講習会、保存環境調査・管理に関する講習会（空気清浄化のための化学物質吸着剤）参加

分　析

(1) 保管環境はＩＰＭ、殺・防虫消毒、温湿度管理、空気環境管理、清掃、定期点検をとおして概ね良好に維持され、全国規模の保管環境研修への館員参加によって、職員個々の技術の維持向上が図られている。

(2) 資料整理員の減員により、入力作業ははかどっていない。

課　題

(1) 資料整理・データ入力の予算・人員確保

取組に対する自己評価

評価できる　［やや評価できる］　やや評価できない　評価できない　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価	
取組に対する 全体的評価	評価できる　［やや評価できる］　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題 方向性等の提言	・評価指標はデータベース公開数の目標が達成できていない。丁寧な資料整理を心がけつつ、計画的に公開を進めてほしい。 ・保存に関する調査測定点検や、IPM 研修等、様々な活動を行い、良好な保管環境を維持している。また、継続的に職員の知識向上を図っており、大いに評価できる。 ・博物館の基本理念、収集方針に則った上で、購入など様々な収集方法を検討できる環境が望ましい。収蔵庫のスペースを考慮しつつ、今後も中長期的な視野で収集・保管計画を立ててほしい。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	展示－常設展示	学芸課
取組方針	・設備・機器・資料の適切な管理に努め、良好な見学環境を維持する。 ・常設展示の十分な活用を推し進める。	
主な実現方策	・日常の適切な維持管理と定期的な資料更新を継続する。 ・より柔軟な展示と活用方法の工夫に努める。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］特集展示

令和３年度	**令和４年度**	
実績	**目標**	**実績**
３件	**２件**	**２件**

○　［評価指標］ワンポイント解説

令和３年度	**令和４年度**	
実績	**目標**	**実績**
486 人	**500 人**	**676 人**

(1) **定期資料展示替え**　新潟県のあゆみ・雪とくらし・米づくり・縄文文化を探る、それぞれについて４月、10 月に実施。
(2) **常設展定期点検**　隔週（照明・電気の点検、ケース内及びガラス清掃）
(3) **常設展の保守点検・補修**　２回（展示品・機器の総合点検）
(4) **常設展のワンポイント解説**　84 回、平均参加人数８人

分 析

(1) 展示資料交換を行っていることが観覧者にわかるように展示期間を明示している。
(2) 設備・機器・資料等は定期点検や保守点検で維持され、良好な見学環境を保ってはいるが、部品供給ができなくなった機器も多い。
(3) 特集展示として、「低湿地の米づくりの身支度」（米づくり展示室）、「ヒスイ『県の石』指定記念 常設展ミニ展示」（縄文文化を探る展示室）を行った。

課 題

(1) 常設展示室のマンネリ化を打破したいが、テーマが固定しているため難しい。
(2) リニューアル方針の決定

取組に対する自己評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価

取組に対する全体的評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・来館者減少などコロナ禍以降の影響がまだ残っている中、特集展示、ワンポイント解説共に、実績は目標値をクリアしている。 ・固定した常設展示の中で、定期的な資料展示の入れ替えや特集展示を行い、マンネリ打破への取り組みが行われている。また、展示の保守点検、展示方法の改善等は変わらず行われており、これらの継続的で地道な取り組みは評価できる。

	・令和 2 年度から導入されたスマートフォン用解説アプリは、充分に活用されているとは言えないが、時代に対応する積極的な取り組みであり、活用が広がるよう試行を続けてほしい。また、スマートフォン用解説アプリには抵抗を感じる世代の来館者も多く、従来の音声ガイドの需要はまだまだ続いているとのことであるが、音声ガイド機器の故障などもあり個数が 8 割ほどに減ってしまっているとのこと。音声解説は重要なサービスなので、引き続き充実に努めていただくよう期待したい。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	展示－企画展示	学芸課
取組方針	・調査研究の反映や収蔵資料の活用によって魅力ある企画展を実施する。 ・集客を意識し、県民の関心を反映した企画展示に努める。	
主な実現方策	・年４回程度の企画展及びテーマ展示の実施を目標とする。 ・入場者の満足度を高める。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取り組み実績

○　［評価指標］企画展示室実施事業数

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
８回	７	９

○　［評価指標］満足度

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
91%	90%	91%

(1)**企画展**

	観覧者数(実績)	(開催日数)
春「浮世絵にみる江戸美人のよそおい」	5,509 人	(39 日)
秋「生業絵巻尽　ひらけ！江戸の産業図鑑」	3,359 人	(39 日)

(2)**関連講演・講座**

新型コロナ対策のため講演会・講座は参加人数を制限して開催した。

(3)**関連イベント等**

春「江戸美人缶バッジを作ろう！」、「江戸時代の鏡師になろう！」(研修室)
秋「小判を作ろう！」

(4)**企画展以外の企画展示室実施事業**

８～９月　・テーマ展示「重要文化財　村尻遺跡出土品」
11～１月　・テーマ展示「大河津分水と信濃川の治水」
２～３月　・新潟県立歴史博物館友の会主催「マイコレクションワールド」
・「キッズ歴史作品研究展」「kid’s 考古学新聞コンクール全国巡回展」
・「原田泰治さん追悼展」「10 年間ふるさとなみえ博物館」

(5)**企画展示室稼働日数**　204 日（開館日 308 日）

(6)**展示図録作成**　令和３年度冬季テーマ展のデジタル版を作成・公開

分 析

(1)体験プログラムは人数制限を行って実施した。また、県外からの来館者への広報を控えた。

(2)春季展は、定番のテーマである浮世絵に加え、実物の装身具を加えたことで来館者の満足（満足度 93%）につながった。
夏季テーマ展は県内の重要文化財を紹介する県立博物館の展示としての役割を果たすものであった。
秋季展は佐渡の世界遺産登録と連携するとともに、研究員の長年の研究成果を還元するもの。近世の生業を絵巻で展示する展覧会は全国的にも稀な事例で高い評価を得た。(満足度 92%)
冬季テーマ展は、県内６館と連携し企画展規模となった。

	(3) 展覧会を通じた県内外の諸団体との連携を図った。 (4) 来館者満足度については一定の評価を得ているといえる。
課 題	(1) 保管環境を守りつつ展示を見せる工夫が求められている。 (2) 開催予算の減少を見据えた実施計画の策定が求められる。
取組に対する 自己評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価	
取組に対する 全体的評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント 及び今後の課題 方向性等の提言	・予算が減額されたことで、令和元年度までは年 4 回開催されてきた企画展が、令和 4 年度は 2 回になったことは残念である。しかし、その代替として、館の所蔵品や資料などを活用し開催しているテーマ展示を 2 回実施していることは評価できる。 ・令和 3 年度、令和 4 年度とも新型コロナの影響を受けながら、2 つの評価指標とも目標数値を上回ったことも評価できる。 ・令和 4 年度の冬のテーマ展示「大河津分水と信濃川の治水」は、大河津分水の通水 100 年という時宜を得た企画で評価したい。 ・今後の新しい状況下で、来館者の関心を意識し、集客を増やせる企画展やテーマ展示の実施を期待する。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	調査・研究	学芸課・経営企画課
取組方針	・本県の歴史系博物館の拠点として、質の向上を目指す。 ・館活動の根幹である調査研究の成果の県民への還元に努める。	
主な実現方策	・総合・個別研究費などを有効に活用した研究活動を推進し、その成果を県民に還元する。 ・講座参加者の満足度を高める。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］外部研究費取得件数

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
10(5)	6	12(6)

() 内は研究分担者分で内数

○　［評価指標］学会発表等件数

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
16 回	11	15 回

○　［評価指標］論文等執筆件数

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
43 件	55 件	39 件

(1) **外部研究費**（科学研究費ほか）

・渡部浩二 「佐渡金銀山技術書群の分析に基づく鉱山資料の集成と鉱山社会史の解明」など

(2) **学会発表等**

・西田泰民「Computed tomography and fiber-tempered Jomon pottery」東アジア考古学会

・山本哲也「博物館、博物館学、遺産、コレクション、資料」日本ミュージアムマネジメント学会　など

(3) **論文等執筆**

・大楽和正「海藻食「えご」食文化を守る・つなぐ・広める」

・宮尾亨「水煙土器と火炎土器」など

分 析

(1)外部研究費は研究分担者を含め、目標を上回る取得件数である。

(2) 論文等執筆件数が目標に達していない。

課 題

(1)　研究成果を積極的に論文化して発表していく必要がある。

取組に対する自己評価

評価できる　　やや評価できる　　やや評価できない　　評価できない　　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価

取組に対する全体的評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・科学研究費をはじめとする外部資金の獲得数は目標の倍であり、本館の調査・研究が学術的に高く評価されている。また、学会等での口頭発表回数も目標値を上回っている。これまでコロナ禍のために発表の機会が制限されがちであったが、それもほぼなくなり、本来の活動が可能になったものと思われる。 ・論文等執筆件数は目標値に達していない。しかしながら、目標値設定当初と比べて人員が減少していることを鑑みれば、39 件という数字は決して低くはない。 ・「論文等」には企画展（「生業絵巻尽－ひらけ！江戸の産業図鑑」）の図録も含まれているとのことである。学芸員の研究成果を展覧会という形で発表するだけでなく、それを図録として残すことも、公立博物館の大きな使命である。それゆえ、図録の作成、そしてそこへの論文執筆は、とりわけ高く評価できよう。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	教育・普及 ／ 学校教育	経営企画課
取組方針	・学校教育に一層活用される博物館を目指す。 ・新潟県民としての自覚と誇りを持つ教育に貢献する。 ・館内及び館外活動の充実を図る。	
主な実現方策	・教育機関への施設利用の周知。 ・体験学習・体験活動の新たなプログラムの開発・導入に努める。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］県内小学校利用率

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
28%	35%	23%

○　［評価指標］体験活動の新プログラム導入件数

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
2	1	2

○　［評価指標］体験プログラム参加者満足度

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
100%	90%以上	100%

(1) **県内小学校来館校数**　96 校（延べ数）

・常設展示案内解説の時間や体験活動など、可能な限り学校の要望を考慮した。

(2) **体験活動の新規プログラム**

・新規オリジナルプログラム「江戸時代の鏡師になろう」、「ヒスイ色の飾りー縄文時代の大珠ーを作ろう」を企画し、実施した。

・体験活動は、三密回避や消毒作業が可能なメニューを中心として実施しているが、感染対策に留意しながら徐々に活動の種類を増やしている。

・その他、参加者連絡先の把握、ボランティアを含むスタッフの感染防止対策、従来より広い会場を使いつつ人数制限及び回数減などの対策を施す等して事業を実施している。

(3) **出前授業の実施**　７回 418 人（まが玉づくり、縄文授業、戦争中の社会など）。

・Ｒ２年度夏季企画展をきっかけに、戦争体験をテーマにした出前授業の依頼があり、他校でも実施できるように内容や方法を検討している。

(4) **教育機関への施設利用の周知活動**

・県内小中高特別支援学校へ利用案内や各企画展チラシを送付した。

(5) **学校との連携**

・県教育庁が行っている高校生インターンシップについては、３名の参加があった。

・中学校の職場体験については、６校から依頼があり、受け入れた。

分 析	(1)コロナウイルス感染症の影響等で県内小学校の利用率が低下している。反面、県外小中学校の利用数は増加している。 (2)体験活動は、限られたメニューの繰り返しではあるが、参加者の満足度は高い水準を維持している。 (3)新規の体験プログラムとして、「江戸時代の鏡師になろう」「ヒスイ色の飾りー縄文時代の大珠ーを作ろう」を企画した。事前に実地テストを行うなど検討を重ね、無事実施できた。 (4)出前授業の実施回数、参加人数は減少した。コロナ禍が落ち着けば令和５年度以降のニーズが見込まれる。 (5)視察や来館の際に、教職員からは展示や解説、体験活動について高い評価を得ている。
課 題	(1)教員層に対する効果的な広報活動の実施 (2)体験活動に関する新型コロナ対策の的確な実施と、それを踏まえた新規メニューの開発 (3)学校からの幅広い要望に応える案内説明やキャリア教育への貢献 (4)新型コロナ対策として、団体の案内を 20 名以下のグループ編成とし、体験活動は「まが玉」60 人以下、その他の活動は 20 人以下で実施するようにした。令和 3 年度より団体対応担当職員数が５人から４人に減員されたこともリ、１日にできる対応団体数（人数）が大きく制限されている。バランスを考えて広報活動をする必要がある。
取組に対する自己評価	評価できる　[やや評価できる]　やや評価できない　評価できない　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価	
取組に対する全体的評価	[評価できる]　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・新型コロナの影響により、利用をちゅうちょする学校が多くあったと推測される。その中でも県内小学校 440 校のなか 96 校、約 9,000 人の学校団体の利用があった。令和 3 年度は約 8,000 人ということを考えると、評価できる。今後も利用促進の広報活動を展開してほしい。 ・体験プログラムについては感染拡大が懸念されるなかで、目標回数を越えたことは評価できる。また、体験活動の満足度は常に高いことも評価できる。今後も新規のプログラムを開拓するなど、積極的な体験活動を期待する。 ・出前授業の依頼が減少しているのは新型コロナの影響によりやむを得ないことであるが、令和 5 年度は利用のニーズは回復していくことが見込まれる。企画展をきっかけにしたテーマでの出前授業を開拓するなど、新たな取組に挑戦してほしい。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	教育・普及 ／ 社会教育	経営企画課
取組方針	・県民の知識・教養を高め、県民が豊かな社会生活を営むための機会や情報を提供する。 ・館内・館外での活動の充実を図る。	
主な実現方策	・社会教育機関との連携に努める。 ・館内講座・出前講座を継続する。 ・ボランティアの受入の推進。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］出前講座の参加者満足度

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
91%	90%	93%

○　［評価指標］館員の講座・講演会の参加者満足度

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
95%	90%	96%

○　［評価指標］ボランティアの活動延人数

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
273 人	500 人	258 人

(1) **出前講座**　県内 11 市町村からの要請で 22 回実施、参加者 543 名

(2) **館内講座**　36 講座を実施、参加者 771 名

・館内講座は、新型コロナ対策として、定員を 36 名に減らして実施。講師の都合により、11 月 12、19 日の古文書講座 2 回は中止した。

(3) **ボランティア登録者** 25 名

(4) **ボランティア活動**

・資料整理、講座の受付、広報活動、体験コーナー補助及び体験メニュー開発と運営への参画

(5) **ボランティア増加の取組**

・新型コロナにより活動の場が減っていること、登録者が一定程度の人数になっていること、ボランティアへの新型コロナ感染防止の観点などから、人数の大幅拡大路線は控え、当分の間、従来の取組を継続する予定である。

分 析

(1) 出前講座は市町村の要請に基づいて計画、実施した。近年の実施回数と人数はＲ２年度 16 回 364 人（新型コロナにより開催削減）、Ｒ３年度 33 回 914 人、R4 年度 22 回 543 人。

(2) 館内講座は安定した参加者を確保し、満足度が高い。

(3) ボランティア登録者はここ数年の間、20 名前後で推移している。Ｒ５は 30 名である。

(4) ボランティア活動については、前年度に引き続きボランティアへの新型コロナ感染防止のため、企画展監視や防災訓練への参加募集を中止した。Ｒ５年度より企画展監視等いくつかの活動の募集を再開する予定である。

	(5) 中学生ボランティアの参加者は２人。Ｒ５年度も長岡市内（周辺地域を含む）の中学生（１～３年）を対象として募集する。
課 題	(1) 出前講座：各地区の生涯学習担当者との連携強化、広報活動展開、実施回数の適正化 (2) 館内講座：固定客の維持、参加者の若年層への拡大 (3) ボランティア：新型コロナ対策をとりながら実施できる活動内容の検討 (4) 中学生ボランティア：募集や活動実施における学校との連携のあり方
取組に対する自己評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価	
取組に対する全体的評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・新型コロナの影響により、出前講座の回数、人数ともに減少したことは当然である。令和 3 年度からは減少したとはいえ、22 回実施、543 人の参加者は評価できる。また、満足度が毎年 90%を超えていることも評価できる。今後も市町村に積極的に広報を重ね、特に来館が困難な地域での生涯学習を推進することを期待する。 ・館内講座に関しては、コロナ禍で人数制限をしていることもあり、人数の増減による比較は困難である。満足度に関しては 96%という高水準であり評価できる。人数制限が無くなった時の参加者の増を期待する。 ・ボランティアに関しても、館内講座同様、コロナで活動停止あるいは縮小せざるを得ない状況が続いているため、人数の増減による比較は困難である。人との関わりが多い案内解説等の対人の活動から、資料整理やメニュー開発等、人との関わりを持たない活動も視野にいれる必要がある。また、コロナ禍が開けた後は、徐々に従来の活動を再開してほしい。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	連　携－学術面の連携	学芸課
取組方針	・県内各地の歴史・文化的価値の再発見と活用を支援する。 ・幅広い団体とのネットワークを強化する。	
主な実現方策	・新潟県の中核機関として、地域史研究や資料保存活動を推進する。 ・県内外の他館及び団体と共催しての巡回展の実施に努める。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］地域史研究ネットワーク事業数

令和３年度	**令和４年度**	
実績	**目標**	**実績**
１件	**２件**	**２件**

○　［評価指標］展示協力等他機関との連携事業

令和３年度	**令和４年度**	
実績	**目標**	**実績**
継続	**継続**	**継続**

(1) **地域史研究ネットワーク**
　・新潟県地域史研究ネットワークニュースの発行（月１回）
　・研究紀要に新潟県関連の文献目録を掲載（年１回）
(2) **移動展**　　１件
(3) **展示協力**　　５件　美濃加茂市民ミュージアムなど
(4) **研究協力**　　２６件　学会役員、自治体文化財審議会委員など
(5) **高等教育機関講師派遣**　　１９件（新潟大学・長岡技術科学大学・長岡造形大学・新潟産業大学・長岡崇徳大学・國學院大學）
(6) **博物館実習受け入れ**　７名

分 析

(1) 地域史ネットワークは研究情報の集約などで地域史研究の進展に寄与している。
(2) 移動展・展示協力・研究協力・高等教育機関講師派遣など、県内外との協力関係が引き続き維持できている。

課 題

(1) 地域史ネットワーク参加団体向け研修を定期化し、また内容の充実をはかっていく。

取組に対する自己評価	評価できる　　やや評価できる　　やや評価できない　　評価できない　　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価

取組に対する全体的評価	評価できる　　やや評価できる　　やや評価できない　　評価できない　　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・地域史研究ネットワーク事業数、展示協力等他機関との連携事業は、どちらも目標を達成しており、評価できる。

	・「移動展」、「展示協力」、「研究協力」、「高等教育機関講師派遣」など、県内外の様々な団体と協力を図っている。今後も工夫をしつつ、主体的に連携を推進していただきたい。 ・課題として挙げている「地域史研究ネットワーク参加団体向け研修の定期化」は、コロナ禍明けの事業として積極的に行ってほしい。新潟県の中核博物館としての自覚を持った自発的な事業の実施が望まれる。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	連携 ／地域づくりに向けた連携	経営企画課
取組方針	・歴史を通じた県内各地の地域づくりに貢献する。 ・近隣の施設や様々な団体との連携を深める。	
主な実現方策	・各種団体との事業共催等による連携を模索する。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］地域団体の活動への参画件数

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
8	15	9

歴史博物館と共催文書を交わしたものを含め、実施した事業数

(1)**新潟県立歴史博物館友の会**

・友の会主催展覧会

「第 19 回マイ・コレクション・ワールド」「原田泰治さん追悼展」「10 年間ふるさとなみえ博物館」の開催（２月～３月）

・映画上映会「縄文にハマる人々」(12 月 10 日)

(2)**県内各種イベントでの体験ワークショップ**

・長岡まつり「観光ふれあい広場」缶バッジ作りワークショップ

(3)**伝統芸能上演会**

新型コロナのため中止

(4)**その他の関係団体**

・信濃川火焔街道連携協議会、関原町サイノカミ有志の会、kid’s 考古学研究所、新潟県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会など

(5)**リピーター割引の実施**

・馬高縄文館、近代美術館、雪国植物園、越後丘陵公園など近隣施設や万代島美術館、自然科学館などの県内美術館博物館の半券を提示することで当館の企画展観覧料を２割引とし、連携を進めている。

(6)**その他**

・関原町サイノカミ有志の会と協働して、平成 12 年度(2000 年)から毎年サイノカミを開催している。

分 析

(1) 新型コロナにより、火焔街道博学連携プロジェクトは R2 年度で活動を終了した。また、様々な事業が実施できず、目標値を下回っている。

課 題

(1)新規団体の開拓

(2)地域の文化団体との連携強化

取組に対する自己評価

評価できる　　やや評価できる　　やや評価できない　　評価できない　　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価

取組に対する全体的評価

評価できる　　やや評価できる　　やや評価できない　　評価できない　　判断保留

評価のコメント及び今後の課題

・地域連携に欠かせないイベントや事業が新型コロナの影響で多くが中止となるなど厳しい状況下で、評価指標である共催事業等による連携団体数が

方向性等の提言	目標数を大きく下回ったことは仕方のないことであろう。 ・新型コロナ禍にあって、19 回も続いている友の会主催の「マイ・コレクション・ワールド」を開催できたことや、2000 年から関原町有志の会と協働して継続してきた「サイノカミ」を実施したことは評価できる。 ・新型コロナも新しい段階に入ったので、様々な手段・手法を用いて、来館者の増加に結びつくように様々な分野の団体等と連携強化を図ってもらいたい。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	情報発信／情報発信	経営企画課
取組方針	・当館の活動について、県民認知度を高める。 ・本県の歴史・文化的魅力を県外・海外にアピールすることで、交流人口の増大への寄与を図る。	
主な実現方策	・リピーターや新規来館者の拡大に向けた広報の展開。 ・IT やマスコミを活用した情報発信の充実を図る。 ・県外客誘致のための広報に努める。 ・観光事業団体との連携を強化し誘客に努める。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］新聞・雑誌・テレビ等に報道掲載された件数

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
192/103/147	200/100/150	211/110/200

○　［評価指標］館ホームページへのアクセス件数

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
129,449 件	100,000 件	118,205 件

(1)**報道掲載**

新聞・雑誌・テレビとラジオ等にとりあげられた件数は、いずれも目標値を上回った。（ただし新聞掲載数は、新潟日報と取材・掲載依頼が直接あった新聞社のみの数）

(2)**インターネット**

・ＨＰアクセス数は目標値を上回った。

・公式 SNS（Facebook, Twitter, Instagram）を活用し、定期的に情報発信した。
※R４．３月末時点での各フォロワー数は以下のとおり。() はＲ３．３月末からの増減値。

Twitter： 13,453（＋625）　、Facebook： 1,881（＋35)、Instagram： 1,959（＋113）

※R４．３月末時点での各投稿数（１ヶ月平均）は以下のとおり。() はＲ３年度。

Twitter：41 件（35 件）Facebook：35 件（30 件)、Instagram：35 件（32 件）

分 析

(1)新聞・雑誌・テレビなどで取り上げられる件数は昨年度に比べると増加（回復）傾向にある。

(2)各 SNS でフォロアー数は増加している。投稿数は昨年度を上回り、1 日 1 回程度の投稿を維持している。

課 題

(1)広報関係予算の効率的な執行

(2)人員減の中での SNS 及びＨＰによる積極的な情報発信の継続

(3)セキュリティ対策の充実

取組に対する自己評価	評価できる　　やや評価できる　　やや評価できない　　評価できない　　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価

取組に対する全体的評価	評価できる　　やや評価できる　　やや評価できない　　評価できない　判断保留

評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・令和4年度は二つの評価指標とも目標を上回った。3年度から専任職員が減り、人員が少なくなったなかで、3年度に引き続いての目標クリアであり、高く評価するとともに職員の努力に敬意を表したい。中でも公式 SNS は1日1回の投稿を維持し、投稿数は3年度を上回った。新たな話題を提供し続けることがフォロワーの増加に寄与しているとみられる。今後もこうしたSNS などでの情報発信に努め、館の魅力をアピールし、来館者数や満足度のアップにつなげていってほしい。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	管理運営	経営企画課
取組方針	・運営方針を館職員で共有し、方針を意識しながら博物館活動を進める。 ・目標の実現に向けた効率的な運営を行う。	
主な実現方策	・自己評価・外部評価の実施。 ・評価結果の的確な反映による PDCA サイクルの確立。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］全体収支比率

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
4.3%	5%	3.5%

○　［評価指標］（評価指標の達成率）

令和３年度	令和４年度	
実績	目標	実績
67%	100%	65%

(1)引き続き新型コロナウイルス感染症対策に万全を期すとともに、運営方針に沿って活動に取り組んだ。
(2)運営方針に基づく検証・評価を継続した。
　・活動評価表の作成及び経営会議での議論等による自己評価
　・外部評価委員による検証と評価
(3)月各１回の課内会議、経営会議、全体会議を連動させて進捗管理に努めた。
(4)施設管理について、老朽化もしくは不具合が発生した設備・機器等の更新・補修を実施した。
(5)来館者の安全・安心確保、要望聴取に関しては、従前の日常的対応（業務日報・アンケート・案内説明員研修等）を堅持した。火災に備えた防災訓練を年３回行い、深化を図った。

分 析

(1)目標の設定・共有を図りながら進める、これまでの館運営の基本的な仕組みを継続し、定着・深化を図っている。

課 題

(1)新型コロナウイルス感染症拡大の影響により減少した入館者の早期の回復
(2)セキュリティ設備を含め、計画的な設備・機器等の更新・補修の実施
(3)PDCA サイクルを定着させ有効に機能させる。

付帯資料

令和4年度第1回新潟県立歴史博物館評価委員会
次第

令和4年 11月 25 日（金）
14:00～
新潟県立歴史博物館研修室

1　開　会

2　議　事

(1)　令和4年度評価について
(2)　令和4年度事業概要について
(3)　新運営方針策定および評価項目検討状況について

3　閉会

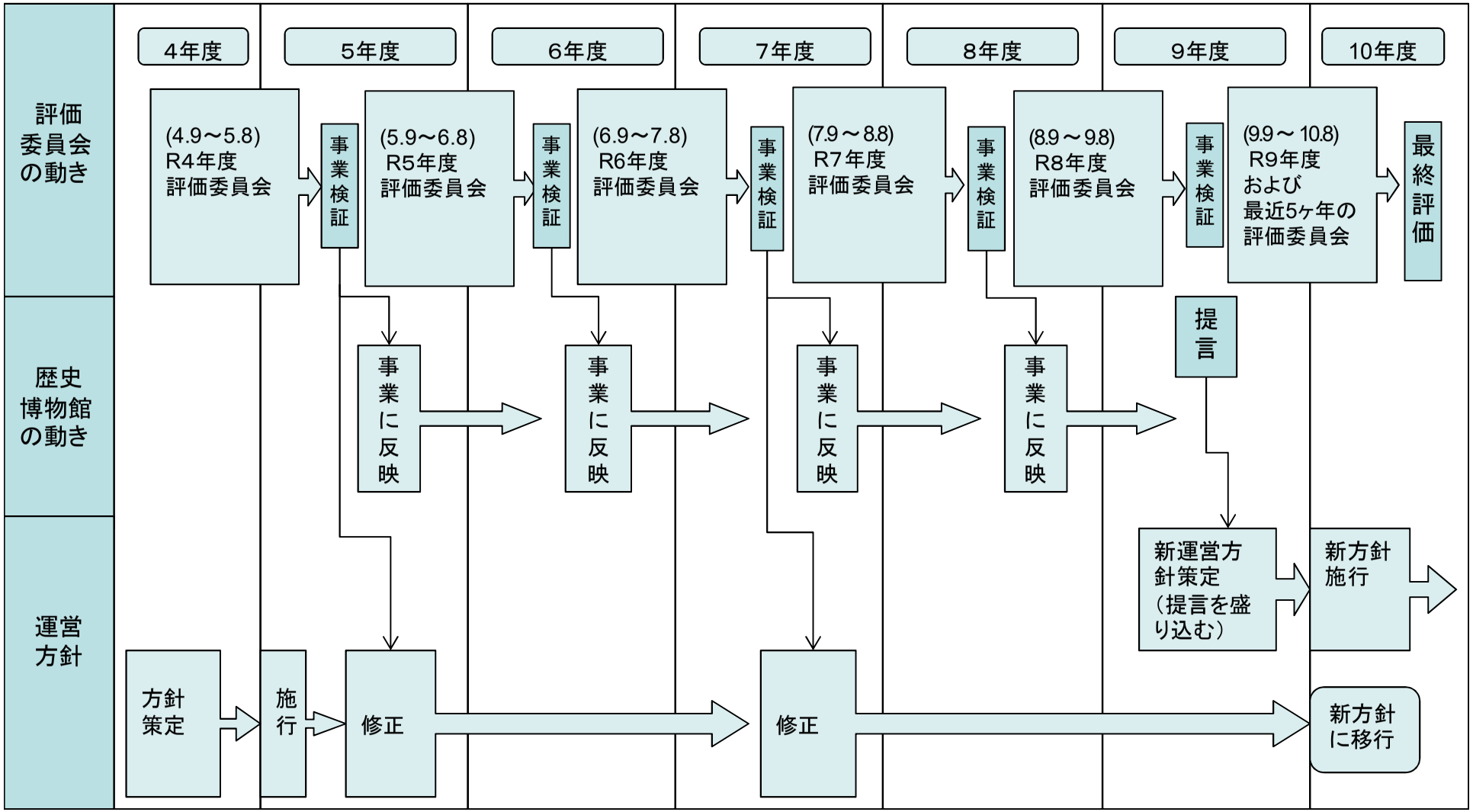
〇配付資料

【資料1】新潟県立歴史博物館の評価委員会について
【資料2】令和4年度委員会スケジュール
【資料3】入館者状況
【資料4】学芸・交流普及事業概要
【資料5】新運営方針策定について
【資料6】評価項目検討状況

新潟県立歴史博物館の評価委員会について

【基本的な考え方】

① 評価委員会では、毎年度、5か年運営方針の取組状況について「事業検証」を行う。
② 毎年の事業検証において、適宜提言を受ける。
③ 5か年運営方針は評価委員会の事業検証及び提言に基づき修正を加える。（7年度を予定）
④ R9年度の評価委員会の提言は、R9年度中に受け、R10年度からの新運営方針に盛り込む。



令和3年度県立歴史博物館評価委員会　スケジュール

		会　議	中間報告	内　容
R4	11月 25日	第1回委員会		委員会スケジュール説明 取組状況説明
	12月			
R5	1月			
	2月	(第1回検討会)		4年度実績確認 新活動評価表検討
	3月			
	4月			
	5月	第2回委員会		自己評価最終報告 評価確認 R5年度事業説明
	6月	第2回検討会	素案検討	報告書案持ち寄り検討
	7月			
	8月		報告書完成・提出	

歴史博物館　観覧者、観覧料収入の状況

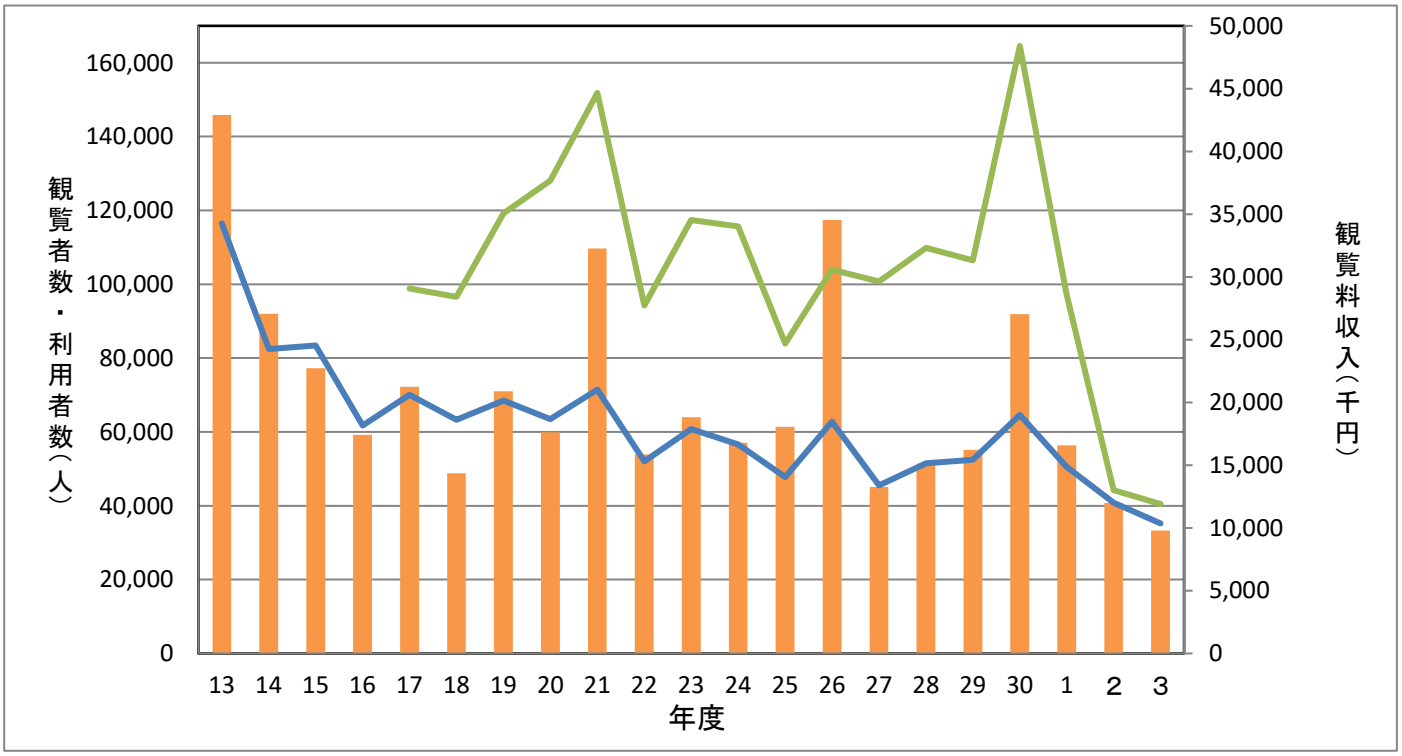
1　観覧者数・観覧料収入

（H12～H14.9の間は未就学児をカウントせず）

年度	観覧者数	対13年度比	観覧料収入（千円）	対13年度比	利用者数	対17年度比	備考
13	116,485		42,900				
14	82,503	70.8%	27,051	63.1%			
15	83,454	71.6%	22,735	53.0%			
16	61,754	53.0%	17,422	40.6%			10.24～12.20中越大震災のため休館
17	70,057	60.1%	21,232	49.5%	98,864		
18	63,315	54.4%	14,366	33.5%	96,592	97.7%	
19	68,491	58.8%	20,896	48.7%	119,203	120.6%	7.16～23中越沖地震のため休館
20	63,510	54.5%	17,615	41.1%	128,118	129.6%	
21	71,461	61.3%	32,252	75.2%	151,801	153.5%	
22	51,987	44.6%	15,856	37.0%	94,271	95.4%	
23	60,788	52.2%	18,821	43.9%	117,425	118.8%	
24	56,665	48.6%	16,774	39.1%	115,639	117.0%	
25	47,791	41.0%	18,062	42.1%	83,915	84.9%	H26親鸞展前売券分5,000千円を含む
26	62,737	53.9%	34,535	80.5%	103,990	105.2%	
27	45,491	39.1%	13,271	30.9%	100,718	101.9%	
28	51,467	44.2%	15,130	35.3%	109,847	111.1%	
29	52,423	45.0%	16,231	37.8%	106,489	107.7%	
30	64,596	55.5%	27,046	63.0%	164,556	166.4%	
1	50,521	43.4%	16,578	38.6%	97,274	98.4%	
2	40,843	35.1%	11,980	27.9%	44,197	44.7%	
3	35,212	30.2%	9,787	22.8%	40,472	41.9%	

※観覧者数　有料者　＋　無料者（未就学、小中、免除者）

※利用者数　常設観覧者数＋企画観覧者数＋館内活動（講演会、イベント等）・館外活動（出前講座、授業等）参加者数



R4 入館者状況

10月末現在	R4年度	R3年度
常設展観覧者	21,867	17,371
企画展観覧者	8,932	8,172
その他利用者	1,771	1,008
収入	7,932千円	7,524千円

企画展開催中の企画展観覧者割合

春季	61%	44%
夏季	－	53%
秋季	37%	－

令和4年度事業概要（学芸課）　令和４年10月末集計

１．　企画展事業

a)　春季企画展 「浮世絵にみる江戸美人のよそおい」 4月23日（土）～6月5日（日）
ポーラ文化研究所所蔵品から制約の多い中で工夫を凝らした女性たちの美やおしゃれへの意識を紹介する巡回展。

b)　夏季テーマ展 「重要文化財　村尻遺跡出土品」 7月16日（土）～8月28日（日）
弥生時代に行われた葬送儀礼を考えるうえで重要な墓地遺跡である新発田市村尻遺跡の出土品を展示。合わせて大きな時代の変化であった旧石器時代から縄文時代かけての遺物を展示した。また、火焔街道2022夏を併設。

c)　秋季企画展 「生業絵巻尽　ひらけ！江戸の産業図鑑」 9月17日（土）～10月30日（日）
江戸時代に発展した各種産業を題材とした絵巻を展示し、産業と絵巻文化を紹介する。また佐渡金銀山絵巻を取り上げ、「佐渡島の金山」の価値を示す重要な資料となっていることを示す。

２．　調査研究事業

a)　科研費取得状況

◎研究代表

＜新規＞

・基盤研究（C）「佐渡金銀山技術書群の分析に基づく鉱山資料の集成と鉱山社会史の解明」

＜継続＞

・基盤研究（C）「博物館から考える民俗学の実践的応用」（2018～2022年度）

・基盤研究（C）「本州中央部の大規模遺跡の再検証に基づく更新世終末の動物資源利用行動の評価」（2020～2023年度）

・基盤研究（C）「史資料原本調査を中心とした中世文書群の伝来に関する研究」（2020～2023年度）

・基盤研究（C）「越佐徴古館」構想の復元を通した「横田切れ」水害被災地の復興」（2020～2023年度）

◎研究分担

・継続：4

b)　その他外部研究費取得状況

なし

c)　論文等

d)　・専門書・専門誌への論文等その他：　9件

e)　・調査報告書・辞典・参考書等：　0件

f)　・一般書・一般雑誌・新聞等：　2件

g)　・学会発表等：　4件

h)　・講演等：　11件

i)　・展示協力等：　2件

j)　・高等教育機関（大学等）への年間講師派遣等　：　20件

3.　常設展示

常設展示ワンポイント解説

・参加者数:　510名／　62回

常設展示資料替え

・4 月実施:　41 件の資料を入れ替え

・7月実施:　13 件の資料を入れ替え

・10 月実施:　33 件の資料を入れ替え

4.　資料収集保管事業

a)　資料寄贈:6件

b)　資料寄託:0件

c)　新規データ登録件数:　11件

d)　新規データ公開件数:　5件

e)　保存環境:大きな事故なし

・IPM 研修実施:4月3回、9月1回

・日常点検継続

・常設展示室内殺虫作業:6 月実施

・収蔵庫内空気環境調査(パッシブインジケータ、イオンクロマト法による)

・収蔵庫清掃実施、点検は毎月実施

交流普及事業等　※令和 4 年 10 月末集計

（１）講座

当館研究員の「調査・研究」活動の成果を広く県民に普及する場として、また、県民の多様なニーズに即した生涯学習の場とするため、講座を開講している。館内講座・出前講座合わせて 860 人の参加を得た。

１）館内講座

人数制限などの新型コロナ対策を行いながら、講座を 23 回開催し、合計で 479 人の参加を得た。

館内講座	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
実施回数	52	56	44	43	43	41	48	48	44	48	40	24	38	23
参加者数	3,159	3,075	2799	2,643	2,749	1,746	2,099	3,044	1,620	3,326	3,743	402	710	479

＊実施内容：古文書講座、体験型講座、企画展関連講座　など

＊新型コロナウイルス感染防止の制限緩和により、9 月以降定員を増加（研修室 36 人、講堂 75 人）

２）出前講座（17 年度以降実施）

9市町村で計 16 回にわたり開催し、合計で 381 人の参加を得た。

出前講座	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
実施回数	19	10	16	16	19	15	17	18	19	23	22	16	33	16
参加者数	997	441	504	838	656	404	648	529	707	745	559	364	914	381

＊実施内容：「戦国時代の女」「明治前期新潟の外国商人」「岡本太郎の縄文土器論」など

（２）体験プログラム

昨年度同様、新型コロナ対策のため、広い会場の研修室で、人数制限（室内最大 20 人以内）のほか、安全対策が可能なメニューに限定するなどの対策をしながら日曜日のみに実施。42 回実施し、合計で 592 人の参加を得た。

館内講座	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
実施回数	116	114	115	125	118	113	116	125	120	114	117	33	22	42
参加者数	3,014	2,920	4,044	5,376	3,294	2,768	3,518	4,671	4,581	4,435	6,087	586	249	592

＊実施内容：まが玉作り、小判を作ろう、縄文コロコロ体験、試着体験　など

（３）学校団体（視察を含む）受け入れ

受け入れた学校団体（視察を含む）は、小学校 81 校 3949 人、中学校 40 校 2057 人、高校4校 209 人、特別支援学校 13 校 99 人、大学5校 77 人、その他 108 団体 1757 人（うち幼稚園・保育園7団体 344 人）であった。

団体受入	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
学校団体数	205	218	224	210	231	202	215	220	224	243	220	178	192	143
小学校	158	169	181	158	175	150	145	160	158	150	140	115	118	81
中高大特校	47	49	43	52	76	52	70	60	66	93	80	63	74	62
その他	203	187	164	168	143	309	239	200	167	189	150	155	136	108

（４）出前授業

県内の小学校・中学校・高等学校から出前授業の要請があり、5校5回にわたり実施した。

	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
実施回数	12	13	10	8	17	26	16	19	22	21	27	15	14	5

＊授業内容：まが玉作り、火起こし、戦争関係についての体験・授業等

（５）職場体験

県内の中学校から依頼があり、6校 41 名を受け入れた。（体験生徒数は延べ人数）

	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
来館校数	6	7	9	9	9	4	5	5	9	8	6	1	3	6
体験生徒数	12	18	35	33	24	27	34	32	73	39	35	9	20	41
実施延べ日数	13	12	17	17	19	9	12	13	20	16	15	3	7	9

＊体験内容：体験活動の準備、受付体験、バックヤード見学、土器分類・洗浄体験、SNS体験等

資料５

歴史博物館の次期運営方針（令和５年度～令和９年度）策定について

R4.11.25　副館長

１　策定の考え方

現方針の策定時以降、新型コロナウイルス感染症などの社会、経済状況の変化はあったものの、博物館活動の根幹に関わるような大きな情勢変化は認められず、また、現方針のもと博物館の機能そのものに大きな支障はなく運営されていることから、現在の運営方針の大枠を堅持し、必要な部分の修正、更新を行う。

２　修正等の概要

現行の運営方針	次期運営方針（現行方針からの変更等の考え方）
１　策定の趣旨 現在、当博物館は「新潟県立博物館の運営方針（平成 24 年度～平成 28 年度）」を定め、資料収集・保管、展示等の諸活動を行っているが、今後ともよりよい博物館づくりを目指すためには、博物館の諸活動の目的を明確化・共有化し、広く県民に提示して不断に活動の検証と改善を行っていくことが引き続き必要である。そのため、今後５年間（平成 29 年度～平成 33 年度）を計画期間とした博物館活動の指針となる新たな「運営方針」を定める。	１　策定の趣旨 ●主に運営方針おける対象年度に修正 ●現行の運営方針の期間が１年延長となった旨を記載
２　当博物館活動の基盤 (1) 博物館条例 (2) 上位計画 新潟県「夢おこし」政策プランでは、その基本理念である「将来に希望の持てる魅力ある新潟県の実現～住んでみたい新潟、行ってみたい新潟～」に向けて、「地域の魅力を高める文化・スポーツの振興」を図る施策を展開することを謳っている。 また、新潟県文化プランでは、基本目標に「文化で創る、心豊かな『ひと』、魅力ある『地域』・・・そして未来へ」を掲げ、「文化の創造」、「文化の交流」、「文化の継承」の３つの施策方向に向けて、県は専門的・広域的な推進役を果たすものと位置づけられている。 (3) 当博物館の運営体制	２　当博物館活動の基盤 (1) 博物館条例　●変更なし (2) 上位計画等 ●現行の県の総合計画や文化振興プランにおける記述内容に修正 (3) 当博物館の運営体制　●変更なし
３　当博物館を取り巻く情勢 (1) 全般的な社会情勢 ・長引く景気低迷や雇用不安など厳しい経済情勢が続くなか、国・地方の財政状況は厳しさを増している。 ・情報通信技術の急速な発展と普及に伴って情報の受発信の在り方が変化してきている。 ・余暇時間の増大と高齢化に伴って生涯学習機会への要請が高まっている。 ・本県においては、全国に先行する人口減少が進むなか、県全体の活力低下が懸念されている。	３　当博物館を取り巻く情勢 (1) 全般的な社会情勢 ●現状の社会情勢に修正

現行の運営方針	次期運営方針（現行方針からの変更等の考え方）
(2) 博物館を取り巻く情勢 ・経済状況、余暇の多様化などを反映して、全国的に博物館総数、及び一館あたり入館者数とも頭打ちの状況となっている。 ・その一方で、生涯学習社会の進展とともに、博物館が利用者、地域住民の要請に応えた運営を行っていくことがますます必要となっている。 ・本県においては、中越大震災からの復興への取組が進み、またその後も度重なる災害を経験するなかで、歴史資料を次世代へと引き継ぐ取組が求められている。	(2) 博物館を取り巻く情勢 ●全国的な博物館の動向を踏まえて修正 ●当館へのニーズなどを記載
4　当博物館の活動の現状 当館は、平成 12 年の開館以来、縄文を中心とした本県の歴史民俗に関して、「収集・保管」、「展示」、「調査・研究」、「交流・普及」、「情報発信」の５つの機能を果たす活動を展開してきた。 具体的には、資料の収集・保存に努めるとともに、研究調査を館活動の根幹としつつ常設展示や年４回程度の企画展を実施してきた。また、館内での講座・体験活動や館外活動、きめ細かな団体案内・展示解説等の充実を図り、学校教育・生涯教育の一翼を担う場としても活用されている。 とりわけ近年は、企画展における各種団体との共催や協力、地域史研究ネットワーク、博物館ボランティアの活発化をはじめ、様々な面で地域連携に取り組んでいる。さらには国の科学研究費等外部資金の獲得による研究等の一層の充実にも努めている。 一方利用者数については、利用者総数（施設機能別（館内外）の利用者数合計）は年間 10 万人前後で推移している。観覧者数（常設展・企画展の観覧券発行数）はしばらく年間５万人台から６万人で推移していたが、近年は４万人台にとどまる年度もあり、やや漸減傾向にある。 平成 23 年度には、参事ポスト（賑わい創出担当）および経営企画課の新設（管理課と交流普及課の統合）を内容とする組織改正を行った。	4　当博物館の活動の現状 ●現状の活動内容に修正 特に、企画展の開催状況等の記載内容や利用者数の推移等は時点修正（新型コロナウイルスの影響を踏まえた記述とする）
5　博物館に対する評価 (1) 夢おこし政策プランにおける評価 平成 27 年７月に実施した新潟県「夢おこし」政策プランの中間評価では、県の文化・スポーツ施策について「概ね順調」との評価を受けた。また、県立文化施設に関して、利用者拡大に向けた取組強化や、地域文化の魅力の情報発信強化などが課題として指摘された。	5　博物館に対する評価 (1) 新潟県総合計画 ●総合計画における評価に修正

現行の運営方針	次期運営方針（現行方針からの変更等の考え方）
(2) 博物館評価委員会における評価 外部評価委員会による直近の評価である平成27年度の館活動に対する評価報告書では、次のような評価を受けている。 歴史博物館評価委員会　平成27年度評価報告書の概要 ・限られた予算と人員の中で、各種数値目標を達成しようとする努力を評価したい。利用者総数は減少しているが、博物館自体の活動は、満足度などから着実に県民に定着しつつあると思われる。 ・来館者だけでなく、館所蔵資料などを外部に対して情報提供（ＰＲ）し、館の認知度を高める必要がある。 ・企画展においては観覧者数が減少しているので、立案にあたっては、県民の多様な要望をより的確に把握するとともに、入館者の増加に努めて欲しい。 ・今後は、上記の自己点検と分析・課題に取りあげられている項目について、より一層の充実をはかるよう取り組んでいただきたい。 ・地域との連携をさらに深め、博物館の調査・研究活動が契機となり、地域住民による地域の魅力や価値の発見、さらにそこから地域創生にもつながるよう努力していただきたい。 ・経年にともなう施設設備・常設展示・機器等の劣化も目につくので、各種機器や展示、設備などの更新についても特段の配慮をお願いしたい。	(2) 博物館評価委員会における評価 ●令和３年度版に変更
６　博物館の基本理念 (1) 基本的な考え方 ○　博物館の目的は「新潟県の歴史及び民俗並びに縄文文化に関する県民の教養を高め、県民の学術及び文化の発展に寄与する」ことにある。 この目的をよりよく達成するためには、これまで記載した現状・評価等を踏まえ、全職員が「博物館は利用者満足が起点」であることを常に意識し、博物館の基本的活動である資料収集・保存、展示、調査・研究等を着実に進める必要がある。そしてその成果を広く還元すべく、より多くの県民にご来館いただき、あるいは様々な博物館活動に触れていただくための創意工夫に努めることが不可欠である。 ○　また、地域の関係機関から頼られる拠点施設としての活動を充実するとともに、地域文化を発信する観光拠点としても認知されることにより、多面的機能を有し、かつ、県内外及び国際的にも開かれた博物館としての地位を確立することが必要である。	６　博物館の基本理念 (1) 基本的な考え方 ●修正なし

<table>
<tr><th>現行の運営方針</th><th>次期運営方針（現行方針からの変更等の考え方）</th></tr>
<tr><td>
○　これらの取組を着実に推進し、厳しい財政状況の中にあっても、県民から理解され支持される存在として発展していく必要がある。
(2) 当博物館の基本理念
これらの基本的な考え方に基づき、博物館の基本理念を次のとおりとする。
○　県民の営みの証である歴史資料を記録・整理・保存し、新たな歴史像※を県民とともに創造していきます。
○　人々と連携しながら、現在から未来へ、地域から世界へと県の価値を発信していくことを使命とします。
こうした活動を通して
『より県民に愛され、利用され、″にぎわいのある博物館″』を実現します。
※「新たな歴史像の創造」
博物館の活動を通じて再発見される新潟県の価値や魅力が、新潟県の歴史についての新鮮なイメージとして、県民の皆さん一人一人の中で実を結んでいくこと
</td><td>
(2) 当博物館の基本理念
●修正なし
</td></tr>
<tr><td>
7　博物館活動の目標
この理念に基づいて活動を進めていくにあたっての成果指標として、博物館の利用者数、及び利用者の満足度を掲げる。
指 標
1 博物館利用者数　　2 博物館利用者の満足度
<table>
<tr><th colspan="2">指　　標</th><th>現状値(平成 27 年度)</th><th>目　　標</th></tr>
<tr><td rowspan="4">1　利用者数</td><td rowspan="2">①　利用者総数
（政策プラン指標）</td><td>（単年度）　100,718 人</td><td rowspan="4">各指標を増加させる</td></tr>
<tr><td>(前計画期間平均) 101,066 人</td></tr>
<tr><td rowspan="2">②　観覧者数</td><td>（単年度）　45,491 人</td></tr>
<tr><td>(前計画期間平均)　53,171 人</td></tr>
<tr><td rowspan="4">2　満足度
（単年度）</td><td>①　来館者満足度</td><td>95%</td><td rowspan="4">各指標を維持・向上させる</td></tr>
<tr><td>②　企画展</td><td>86%</td></tr>
<tr><td>③　講座等</td><td>講座・講演会　91%
体験コーナー　99%</td></tr>
<tr><td>④　来館者応対</td><td>99%</td></tr>
</table>
</td><td>
7　博物館活動の目標
●現状値等を令和３年度に修正
</td></tr>
</table>

現行方針	次期運営方針（改定の考え方）
〔各指標の数値について〕 １－① 利用者総数 博物館が行う以下の活動・機能ごとの利用者を加算した数値 （常設展＋企画展＋講演会・講座＋体験コーナー＋その他イベント等＋館外活動（出前講座・授業、移動・巡回展）） １－② 観覧者数 常設展及び企画展のチケット販売数＋無料観覧者・視察者 ２－①～④ 満足度　利用者・参加者等のアンケート回答に基づく	
８　博物館の活動方針 上の目標と併せて、博物館の使命達成と基本理念の実現に向けた活動を行っていくため、当博物館が有する機能や主な取組分野ごとに以下のとおり活動方針を定める。 **(1) 収集・保管** ・本県の歴史を明らかにするために欠かすことのできない資料の収集・整理に努めると共に、そのデータ化を推し進める。 ・良好な資料保存環境を維持する。 **(2) 展示** ◇ 常設展示 ・設備・機器・資料の適切な管理に努め、良好な見学環境を維持する。 ・常設展示の十分な活用を推し進める。 ◇ 企画展示 ・調査研究の反映や収蔵資料の活用によって魅力ある企画展を実施する。 ・集客を意識し、県民の関心を反映した企画展示に努める。 **(3) 調査・研究** ・本県の歴史系博物館の拠点として、質の向上を目指す。 ・館活動の根幹である調査研究の成果の県民への還元に努める。	**８　博物館の活動方針** **●(1)～(7)の機能、活動方針は修正なし**

現行方針	次期運営方針（改定の考え方）
(4) 教育・普及 ◇ 学校教育 ・学校教育に一層活用される博物館を目指す。 ・新潟県民としての自覚と誇りを持つ教育に貢献する。 ・館内及び館外活動の充実を図る。 ◇ 社会教育 ・県民の知識・教養を高め、県民が豊かな社会生活を営むための機会や情報を提供する。 ・館内及び館外での活動の充実を図る。 **(5) 連携** ◇ 学術面の連携 ・県内各地の歴史・文化的価値の再発見と活用を支援する。 ・幅広い団体とのネットワークを強化する。 ◇ 地域づくりに向けた連携 ・歴史を通じた県内各地の地域づくりに貢献する。 ・近隣の施設や様々な団体との連携を深める。 **(6) 情報発信** ・当館の活動について、県民認知度を高める。 ・本県の歴史・文化的魅力を県外・海外にアピールすることで、交流人口の増大への寄与を図る。 **(7) 管理運営** ・運営方針を館職員で共有し、方針を意識しながら博物館活動を進める。 ・目標の実現に向けた効率的な運営を行う。 ・来館者への安全・安心の提供に努めるとともに、来館者などの関心や目線に常に注意を向ける。	

現行方針	次期運営方針（改定の考え方）
９　活動方針に基づいた取組の実施・進捗管理 上記の活動方針の達成を目指した博物館活動が確実に行われるよう、取組分野ごとの今後５年間の「主な実現方策」、及び５年後の到達目標となる「評価指標」を定める。〈別表〉 また、各年度の具体的な取組については、今後の社会情勢の推移、県民や利用者のニーズの変化、現実の館運営体制などに応じたものとする必要があるため、本計画の「活動方針」・「主な実現方策」のもと各年度において検討する。 こうした博物館活動の取組について、毎年度、館内での自己評価を行うとともに、評価委員会からの評価を受ける。これらを通じてＰＤＣＡサイクルによるマネジメントに取り組む。 活動の評価にあたっては、博物館の使命達成の観点から多面的に分析を行う。	９　活動方針に基づいた取組の実施・進捗管理 ●修正なし ●別表中の機能別「主な実現方策」、「評価指標」は引き続き検討
10　更なる充実に向けての課題 当博物館が更なる充実した活動を行っていくには、上に掲げた活動方針の達成に併せて、次に記載するような課題に取り組んでいく必要がある。これらの課題は、外部要因に大きく依存するものや、博物館単独では解決が困難なものであるが、当館として可能な限りの進展を目指して取り組む。 －　博物館資料のデータベース化の推進 －　施設・設備の大規模改修等による展示環境・資料収蔵環境の改善 －　アクセス改善やレストラン・ショップの継続的営業による来館者サービス向上 －　博物館の人事・組織体制の充実 －　外部団体や支援者との協働推進	10　更なる充実に向けての課題 ●個別の課題は引き続き検討

資料６

機能	取組分野	現行評価項目	変更案	
収集保管	収集保管	目録刊行準備		保存環境維持は重要であるが目標値設定になじまない
		データベース公開件数		
展示	常設展示	新規特集展示	展示手法試行件数	テーマ展示が常態となっているため変更
		ワンポイント解説		
	企画展示	企画展示室実施事業数	展示ジャンル数	幅広い来館者層に対応しジャンルをカバーできているかを指標とする
		満足度		「大変満足」と「満足」の比率を指標に加えるか
調査研究	調査研究	外部研究費取得件数		
		学会発表等件数		
		論文等執筆件数		目標値見直し
教育普及	学校教育	県内小学校利用率		中学校、県外校の利用数が増えているが目標値の設定が困難
		体験活動新プログラム導入件数		
		体験コーナー満足度		
	社会教育	出前講座満足度		
		館員講座満足度		
		ボランティア活動延べ人数		ボランティアを労働力ではなく教育的側面から考え、社会教育の項目として残す
連携	学術連携	地域史研究ネットワーク事業数		学術連携と地域連携を区分することが困難な場合もあり
		他機関との連携	削除	連携として一体化させるか。
	地域連携	地域団体活動への参画件数		
情報発信	情報発信	新聞雑誌テレビ報道掲載件数		
		館ホームページアクセス件数		マンパワーの点からSNSを指標にすることは難しい

令和４年度第１回評価委員会　議事録

令和４年 11 月 25 日
14 時～16 時
歴史博物館研修室

出席者：田中委員長、山本副委員長、大塚委員、金山委員、内藤委員、湯浅委員、樋山参事、斎藤館長、反町副館長、浅井学芸課長、山田経営企画課長、種岡研究員、山本研究員、西田研究員

事務局
これより第１回評価委員会を開催する。

文化課樋山参事　挨拶要旨
今年度もよろしくお願いしたい。県では行財政改革行動計画を実施中であり、歴史博物館に限らず予算面では厳しい状況が続くが、我々県職員には限られた資源をいかに有効活用するのか知恵が求められていると思っている。建設的な助言をいただきながら、県民サービスを下げない努力を続けたい。

館長挨拶要旨
コロナと予算の影響が厳しい。効率的予算運用といわれるが難しいところだ。委員には専門的立場と県民目線から忌憚のないご意見をいただきたい。外部からの意見を十分に聞いてやっていきたい。

事務局
今回委員の交代はなかった。前年度に引き続き田中委員、山本委員にそれぞれ委員長、副委員長をお願いしたい。

委員長
いろいろな分野のエキスパートが集まっていて自分も刺激を受けている。意見を述べあって進めていきたい。一番の関心事である運営方針の見直しについてから始めていきたい。

副館長
資料５にもとづいて説明を行う。運営方針の策定の考え方については、社会経済情勢に変化はあるが博物館活動の根幹にかかわるような大きな変化はない。また博物館の運営に大きな支障を来す影響も受けていないことから、大枠は堅持し、必要部分の修正を行うこととしている。
現行方針は 10 項目から構成されている。１の策定の趣旨については内容変更の予定はない。評価の年度対象の変更のみである。２の活動の基盤については、条例、上位計画について記述したものである。条例改正はなかったので変更はない。上位計画は現行の総合計画、文化振興プランの内容に変更する。運営体制については、変更は特にない。３の博物館を取り巻く情勢については、全般の社会情勢と博物館を取り巻く情勢からなっている、現状の社会情勢や全国的な博物館の動向、ニーズを踏まえた記述に修正したい。４の当博物館活動の状況については、現在の活動状況に即し、特に企画展の開催状況や利用者の推移

についてコロナによる影響を合わせて記載を行い修正する。次の博物館に対する評価については、現行の総合計画における文化施設の評価に修正する。次の評価委員会の評価については 8 月の直近の令和 3 年度の評価に修正する。6 の博物館の基本理念についてであるが、基本的考え方、当博物館の基本理念については大枠は変更しない。7 の博物館の活動目標について、指標である利用者数、満足度とも評価の継続性もあり、大枠を変えず、2 つを維持し、表の現状値を直近の 3 年度の数値に修正する。8 の博物館の活動方針についてであるが、（1）～（7）まで記載がある。内容は基本は変わらないことから修正はしない。9 の活動方針の進捗管理についても記載内容の修正はしない。ただし、別表については次の議題で検討状況を説明する。10 のさらなる充実についての課題はこれまでの委員からのご意見を踏まえ、検討を続けたい。

委員長
評価委員が運営方針にどのような立場で、どこまで意見を言っていいのかということはあるが、まずは質問をつのりたい。この方針が定まったところで、我々にとって重要な評価指標が決められるということだ。

委員 A
評価項目については引き続き検討していきたいとのことであった。もう一つ引き続き検討というのがあったようだ。

副館長
さらなる課題の実現に向けてという部分についても引き続き検討としている。

委員 A
主体はだれか

副館長
館が検討して委員に提示する。評価指標の見直しについて、この後で説明する。資料 1 の 4 年度のところに策定としているのがそれにあたる。

委員 A
評価項目を検討する必要は委員にはないということか。

副館長
現在の検討状況をここで報告し、ご意見をいただき、それを踏まえて成案を決定したい。

委員長
評価委員会がすべきことのスケジュールを説明願いたい。

事務局
４年度は前年度の評価指標に基づき評価を行い、今年度中に次年度以降５か年の運営方針と項目策定の作業を行うこととしている。その過程をこの委員会で説明し、意見をいただいたうえで２月か３月の検討会で再度諮るスケジュールを考えている。

委員長
今日は運営方針と評価指標について委員会側から意見をいい、論点を明らかにして２月頃に行われる検討会においてフィードバックしてもらい決めるということだ。館では来年４月から新方針に基づいた活動が始まり、来年のこの時期に始まる評価委員会であたらしい項目による評価を行う。現運営方針は６年使ったのだが、次年度からを４年に短縮するわけではなく、５年間とするということだ。

副館長
今回は決定するのではなく意見をうかがう会であるとお考えいただきたい。

委員長
運営方針の説明があったが、疑問点はあるか。
２－４で変更点として、企画展の回数の変更という理解でよいか。利用者数の推移の修正というのは具体的にどういうことか。

副館長
年間１０万人前後と書かれている部分を現状の数に修正をする。

委員長
組織改正の記述があるが、残るのか。

副館長
この部分は削除する。

委員 A
方針策定は次回が締め切りとなるか。

副館長
今年度中に取りまとめる。必要に応じて、持ち回りで説明することも検討している。
作業自体は館で行い、次回案を提示する。

委員 A
策定方針の視点が間違っていないかという確認をするということでよいか。

副館長
そうである。

委員長
極端な話をいうと、この方針ではだめだという意見もありうるということだ。

委員 A
基本的に大きな変更はなく、現状に合わせて数値を見直す程度ということか

副館長
そうである。

委員長
委員会としては運営方針をこれまであまり目にする機会がなかったゆえ、論点が見えにくい。そのため、馴染みのある評価指標について先に検討したい。その結果を踏まえて運営方針の議論に戻ることにしたい。

事務局
資料 6 に見直しの説明がある。
資料保存について、項目に入れるべきではとの意見が以前の委員会で出ていた。これについて検討を行ったが、事故が起こらないことを目標設定とするのはあまりなじまないのではないかと考える。どの程度の不具合があったらマイナス評価になるのかの基準が難しいため、従来のように説明書きを加えることで活動を示したい。
常設展示については、拡大常設展であるテーマ展が 2 回行われるようになったので、常設展示室での特集展示の意味が薄れている。新たな展示手法や展示要素を加えたというリニューアルにつながる展示手法の施行を加えてはと考えている。企画展示室をなるべく使うのは目標であるが、企画展そのものの評価にはならないので、別途、年間の企画展示がどのくらいのジャンルをカバーしているか、さまざまなニーズに応える展示ができているのかということでジャンルの数で示してはどうかとの意見が出ている。歴史民俗考古だけでなく、今回は土木であり、春の企画展では美術、工芸のジャンルが入っていた。満足度のアンケートについてはたびたびご意見を頂戴している。ほかに満足度をはかる有効な手立てがないため、満足度は現在、「大変満足」「満足」を合わせているが、そのうちの「大変満足」の割合を増やすことを目標とすることも考えられる。目標値の設定はやや困難であるが、あらたな項目として検討している。ちなみに満足した人がアンケートを書いていっているのではないかとの意見があったが、この春の展覧会では約 3 割の人が展示手法について批判的なことを書いていた。しかし満足度は 90%を超えていた。あながち満足したからアンケートを書いていったということではないように思われる。調査研究は目標値を見直すことを考えている。学校教育については、現状のままとしている。社会教育について、ボランティアが社会教育にあたるのかという意見があったが、ボランティア活動を通じて学んでもらうということを重視し、社会教育の項目とすることにしている。次に連携であるが、学術と地域に分かれてい

るが、どちらともいえないケースがあったり、定量的指標が一つずつしかないという状況であり、一本化することも考えている。最後に情報発信について、報告書でも SNS 発信強化が触れられており重要であるのだが、目標にしてしまうと担当者の負担が過剰になる可能性もあり、項目とするよりは記述にとどめたいと考えている。以上、項目として変更があるのは 3 点ほどという状況にある。

委員長
博物館機能は変わらないので、連携部分をまとめる以外は現状のままということのようだ。
収集保管の維持は目標値設定になじまないとあるのはどのように変更を考えているのか。

事務局
評価項目に加えるのは難しいと考えている。

委員長
数値化しにくいということか。

事務局
もし事故が起こった場合にどの段階で回復したとするのか判断が難しい。
職員の責任ではなく、建物の劣化により生じることもあり、復旧に数年かかることもありうる。

委員 B
数値化にはなじまないというのは確かにそうだ。年度中の実績は示されている。数値があった方が、わかりやすいことはある。

委員長
どの項目でもよいので、ほかにあれば。

委員 C
学校の利用率だが、中学校や県外校の目標値設定が難しいとのことだ。せっかく増えているので、県内の中学校の利用率の数値設定はできるのではないか。

種岡
当初小学校の学習利用という前提で目標値が設定されていた。中学校については、校数なのか、生徒数なのかスタート時点からの数値がなく設定しにくい。

館長
小学校は学習内容に地域の学習があるが、中学校にはない。コロナで修学旅行が県内に振り替わって、増えているという状況がある。今後も継続的であるかわからない。努力して増やせるかというと、目標にしていくのはなじまないと思う。

委員 D
企画展示の満足度についてだが、大変満足・満足の度数を見るということか。

事務局
以前のデータを見て、可能か検討をしている。

委員 D
いかに来館者の意見を聞くか難しいとは思うが、どの程度意見を聞いたかを指標にはできないか。

委員 B
5 割の人が答えても、1 割の人が答えても、満足度にしてしまうと一つの値になる。

事務局
かなり前の例であるが、ある館で複数の方法でアンケートをとり、回収率を比較したことがある。景品を付けた時が最も回収率が高かった。回収のための人をつけなければならない。企画展の際に 2 日ほど、声をかけてアンケートを行うことがあるが、その時は通常 10%くらいなのが 20%ほどになる。

委員 A
アンケートとして最後にいすが置いてあるところで行っているのが、回収されているのか。

事務局
それは通常の時で、企画展の期間中２， ３日、出口のところでアンケートをお願いすることをやっている。

委員 A
コンサートでは入場の時にアンケート用紙を渡され、半ば強制的にアンケートを書かされることがある。

事務局
講演会などではそうしている。また、実際に、そうしたことを試みたことがあるが、家族連れなどで来た時に誰に何枚わたすのかということがあったり、それほどは回収率は高くなかった。

委員長
アンケートという形で考えると運用の仕方や経費の問題がある。館と来館者のコミュニケーションツールとして位置付ければどうか。今の展示室の付箋のように項目を絞って行うなど、来館者もほかの人の意見をみることができる利点もある。そのような指標はどうか。

委員 A

さきほど見てきたが、確かに付箋は見ていて楽しかった。
いろいろな工夫がまだできると思う。

委員長
来館者の意見をくみ取ることを検討してほしい。

副委員長
学校の調査などはグーグルフォームで送信できるようになっている。紙よりハードルが低いと思う。

事務局
用意はしている。来館者層のせいか、あまり回答はない。

委員 A
ボランティアの件だが、もともと数が少なくなかったか。

委員長
数で評価する方針なのか確認したい。

委員 C
ボランティアを社会教育の一環として受け入れているならば、施設の役割としてその数を増やすのはかなっていると思う。ただしコロナ下での目標値設定は議論があるところだと思う。

委員長
案では従来通り、目標何人ということで残すということだ。評価する側としては数値があるのはわかりやすい。人数を変える予定なのか。

事務局
この 5 年間の実績を見て、再検討するかこのままでいくか判断することになる。

館長
目標の多寡を実績としてどのように設定するか問題はあるが、社会教育施設でもあるので、参加機会を提供することは博物館の一つの使命である。人数は実情に合わせて設定する。活動内容を増やすとか絞るとかについてもご意見をいただければと思う。

委員長
博物館の中を知ってもらうことは、支えようと思ったり、好きになってもらうきっかけになる。
是非活発化することを祈っている。

委員 A
目標数値の善し悪しも委員が検討するのか。

館長
次回、具体的数値について意見を頂ければありがたい。

委員 C
素案とこれまでの数字の推移を見て意見を述べたい。

委員 B
ボランティア延べ人数の中で、中学生ボランティア、大学生ボランティアを除くとあるが理由は。

山本
大学生ボランティアは以前企画展の時に募集したことがある。イベントに伴ったボランティアであった。中学生も夏休みの期間のみであり、高校生以上で年間を通した活動についてカウントすることとしている。

委員長
企画展の指標で、事業数をジャンル数に変えるという説明があった。事業数については以前から疑問に感じていたところなので、変更することはよいと思う。なぜこのような指標になったのか。

事務局
数値化できるものは何かというところから出てきた案である。様々な方に利用していただくのが目的であるので、それを実現するためにはという発想からになる。

委員長
考え方としてはいいと思うが、数値としてどのあたりを落としどころに考えるのか。

委員 B
たとえば考古でもあり美術でもあるという展示がありうるが。

事務局
それは両方で数える。3 以上になることもありえる。

委員 C
ジャンルという概念がわからない。時代で切るわけではないようだ。美術ぽいものとか、今回のようなのは土木とか、そういう意味か。

事務局
そうである。

委員 C
多ければ多いほどよいという単純なことでもないと思う。より多くの人の関心を呼ぶことにはなるとは思うが。

館長
あれだけのスペースのある企画展示室の空いている期間を少なくするというのが基本的な考え方である。現状の予算枠では企画展を 2 回しかできないので、そのほかにプラスアルファを加え、県民サービスを提供する努力をしている。ジャンルにこだわっても事業数にこだわってもいいが、有効活用し県民サービスを提供しようというのが根底にある考え方だ。

委員 A
職員にプレッシャーのかかる話だ。

館長
あれだけのスペースを持っている博物館でそれを閉めていていいのかという問題もある。今回の展示ではアンカーであったこともあり、他の館からスペースが広いのでこれも展示して欲しいとの要望があり、あれだけの展示になった。事業数にしても、ジャンルにしても多彩なものをやっていこうという一つの考え方である。また指標の数字を出して、御検討いただきたい。

委員 A
常設展示の展示手法の試行件数というのを説明して欲しい

事務局
具体的に行った過去の例では、雪と縄文のジオラマの後に展示の説明を加えた。ジオラマの中では全く解説を省いており、来館者が何もわからずに通り過ぎてしまうことがありうる。展示解説器を使っていない方のためにパネルを最後に加えた。今年度ではマルチリンガルの QR コードをつけて、スマートホンをかざすと自分の使っている言語で解説が見られるというものを試しに加えている。常設展示の魅力を上げる試行を行ったかどうかを指標にできないかということだ。

委員長
運営方針に戻って、改めて質問はあるか。

委員 A
成果品になった場合、策定の考え方の部分は文章として示されるのか。

副館長
この資料の状態ではなく、形にして示す。

委員長
評価指標について質問は出たが、あまりこうした方がいいという意見はでなかったようだ。
運営方針の策定、評価項目見直し状況についての議論はこれまでとして、休憩とする。

（委員 C 退席）

委員長
では、再開する。今年度事業概要について説明をお願いする。

経営企画課長
入館者状況について説明する。観覧者数は、無料・有料の観覧者の合計で、コロナの状況が顕著となった令和２，３年度が下がっており、それに比例して観覧料収入も落ち込みが顕著である。利用者数は観覧者数に様々な活動でお出でいただいたお客様の数を加えたもので、観覧者数ほどではないが、この 2 年落ち込みが顕著である。いろいろ頑張って工夫をしているが、残念ながら落ち込んでいる状況である。

学芸課長
春は巡回で浮世絵を中心とした展示であった。秋は館蔵資料に加えて、各地の江戸時代を中心とした生業をあらわした絵巻を展示した。夏は新発田市から預かっている村尻遺跡の重要文化財指定品を中心に展示し、合わせて火焔街道 2022 夏を開催した。縄文時代中心の展示であった。現在は県内 6 館連携で大河津分水をテーマとした展示で科研の成果なども取り入れて規模が大きなものになった。
調査研究では科研の基盤研究 C が新たに採択された。論文などは年度末に向けて増えると見込まれる。ワンポイント解説は時間を短縮しているが回数は従来通りである。資料替えは示したとおりである。収集保管については整理員がいないので整理が滞っており、データ入力、公開件数とも少ない状況にある保存環境については大きな問題はない。老朽化した機材の問題は出ているが何とか保っている。

種岡
講座、体験プログラム、学校団体については資料の通りである。出前授業はコロナ禍以降だいぶ減っており、まだ 5 件のみである。資料にはないが、学校団体の人数については昨年度、一昨年度よりだいぶ増えてきている。職場体験はコロナ禍では中学校の外に出られないということで、だいぶ少なくなっていたが、今年度は 6 カ校利用があった。

委員長
ワンポイントの人数は戻ってきたとみてよいか。

学芸課長

そうである。

委員 A
企画展のそれぞれの入場者数は？
経営企画課長
浮世絵は 5509 人、生業は 3329 人である。

委員 D
会期日数が違うのか。

山本
ほぼ同じである。

委員 A
生業展の展示の構成についてだが佐渡金山が最後になっていたのは何か理由があるのか。

学芸課長
担当者の意図によるものと考える。佐渡の絵巻はほとんどが館の所蔵品であり、展示のきっかけとなったものでもあるので、最後に配置した。産業絵巻の多彩なところを先に見せるという意図であったと思う。

委員 B
収集保管の評価項目についてだが、保存環境について重大事故なしという報告だったので、事故なしというのを項目にできないかと思う。

館長
軽微、中規模なものがありうるし、0 が 100 点という評価は目標化しにくいという面がある。指摘があったので、検討をして次回報告をしたい。

委員長
大学でも自己評価があり、そこには自己アピール欄がある。ここでも自由記述欄があって、館のアピールが視覚化できればよいと思った。

副委員長
いいアイデアだと思う。打って出るというのも大切だと思う。

館長
総括に分析・課題の欄に館としての記述はあるが、これとは別にということか。

委員長
分析とあると、必ずしもよいことが書いてあるとは思わず読んでしまう。注目してもらいたい良いことがあるならば、すぐ見て分かるようにした方がアピール力があるということである。

事務局
これで閉会とする。

令和４年度第2回新潟県立歴史博物館評価委員会
次第

令和5年6月 12 日（月）　14:00～
まちなかキャンパス長岡　302 会議室

１　開　会

２　議　事

(1)　令和4年度評価について
(2)　令和5年度事業概要について

３　閉会

○配付資料

【資料1】R4 活動評価表（事前配布）

令和 4 年度第 2 回評価委員会　議事録

令和 5 年 6 月 12 日
14 時～16 時
まちなかキャンパス　302 号室

出席者：田中委員長、山本副委員長、委員 D、委員 C、委員 A、委員 B、広井課長補佐、小原館長、反町副館長、浅井学芸課長、山田経営企画課長、山本研究員、西田研究員

事務局
これより第 2 回評価委員会を開催をする。

広井課長補佐（挨拶主旨）
本日の会議への出席、および本県の文化行政への理解に感謝申し上げる。
昨年度は、まだ新型コロナウイルスがあり、集客面など、厳しい状況が続いていた。運営の評価についても難しい部分があるが、ご協力をお願いしたい。今年度は県の文化振興財団を一体化する形で、文化課に芸術文化振興室というものが設置された。芸術文化振興政策を一層充実推進して、効果的な事業展開を図っていく。博物館が文化発展の拠点として役割を担うとともに県民の幅広い要望に応えながら、ますます発展させてていくためにご意見をいただきたいので、よろしくお願いしたい。

館長（挨拶主旨）
前斎藤館長の後を引き継ぎ、4 月より新しく館長を務めさせていただいている。
現在コロナ禍対応が収束方向に向かいつつある。これまでとまた違った環境下にあるので、評価委員の皆様から幅広く忌憚のないご評価を頂戴したい。しっかりと今後の博物館の運営にあるいはそのマネジメントに生かしていきたい。
今回評価をいただく内容は、令和 4 年度の活動内容であり、令和 4 年度の館運営については、新型コロナウイルス感染症の館活動への影響を考慮して、平成 29 年度から令和 3 年度までの 5 ヶ年の運営方針を 1 年延長して運用することとしているので、従来の令和 3 年度までの目標をもとにご評価をいただくことになる。今年度からは、新たな令和 5 年度から 9 年度の運営方針をもとに活動して評価をいただきたい。

事務局
これより委員長に議事をお願いする。

委員長
今日は令和 4 年度の活動について、委員会としての評価をして、執筆の分担をする。順番に説明をもらいながら、こちらの評価も確定していきたい。いつものように総括については最後にするので、まず収集保管について簡単に説明いただきたい。

学芸課長
収集保管に関しては、指標が二つあり、資料目録については越後文書宝簡集が刊行された。データ公開数については毎年のことであるが、資料整理が追いつかず目標値に達しなかった。専門の職員が行わないとならない作業である。保管については大きな事故はなかった。公開数については足りていないが、全体としては評価できるとした。

委員長
やはりデータベースの公開数は、前回の会議では、3 月末までにもう少し進められるのではないかとの話だった。分野によってはどう頑張ってもアルバイトをお願いするだけでは解決しないということか。

学芸課長
専門的知識が必要で、ボランティアなどには任せることができない。

委員長
データベース公開の順序はどういうふうにしているか。
たくさんの資料の中から既にデータベースができていると思うがどこの分野からとかそういう戦略はあるか。

学芸課長
主要部門ごとにまとめて行っている。今は大名家の文書を対象にしているが、まだ全体像が見えていない状態にある。

委員長
重要度などから公開の準備を進めているのか。

学芸課長
そうである。整理しやすいところから手をつけてきた実情もある。

委員 A
令和 3 年の実績が目標をクリアしていたが、今回は大きく数値が落ちている。人材不足が原因か。

学芸課長
３年度は駆け込みで入力をしたところもあった。民具のうち情報が記入されていなかったものを処理した。

委員長
データベース以外の部分はどうか。この項目は判断材料がそんなに多いものではなく、所蔵資料の事故という点では、いつも良好な結果である。いわゆるツッコミどころで言うとデータベースぐらいだと思う。収集保管の活動全般の中でデータベース化の数がそこまで重要な位置しめるかというと、もっと大事なことは事故がないことかと思う。
収蔵品の増加は、もちろん望ましいことだが、これについては現在購入はできず、収蔵に足る資料の寄贈の提案を受けたときに受けられるかということだろう。

学芸課長
収蔵庫も民俗資料については満杯で簡単には受け入れられない。

委員 B
データベースについて、来年度以降は目標値に近づける見込みはあるのか。話を聞くと、なかなか難しいという印象だ。

学芸課長
これまで、新たに公開したものを数えていたが、次からは新たに解説文を加えてデータを充実させたものも公開した数に加えていこうと考えている。

委員 B
ただ写真とタイトルだけではデータベースとしては不十分だ。

委員長
委員会としての評価はどうするか。博物館の収集保管は、単に収蔵庫の中に安全に保管していればよいだけでなく、

それをいかに活用するかも大事である。展示がもちろん重要で、データベースの公開も一つの活用方法となる。努力をされているので自分としては評価するでもよいかと思うが。
収蔵庫がいっぱいであるというのは今後どうなるのか。

学芸課長
受け入れを中止するというのも方策だ。開館当初は収蔵庫の増築の話題もあったが、今は考えにくい。

委員長
常設展のリニューアルと収蔵庫とこれから大きくなってくる話であろう。

学芸課長
民俗資料だけでなく、ほかの収蔵庫も埋まりつつある。

委員長
切りがない問題であるだろうが、何年か前に見学したときには案外まだ余裕があるように見えた。まだ大丈夫という説明だったような気がしたのだが、その後増えているということだ。
評価で、この問題も着目してもいいかと思う。評価できるかどうかもあるが、コメントのところでデータベースもそうだが、収蔵庫の余裕がなくなりそうだが、その具体的な方策がまだ出てないという点を触れるべきか。

副委員長
昨年の資料を見ると分析の文章が変わってない。今年度の評価指標と書いてあってデータベース公開 300 が 112 であるという。これを県民の皆さんに約束というか、目標で出している。それが 112 ということだった。さまざまな要素というか、なかなかうまくいかないことがあることは承知するが、「評価できる」では良すぎると私は思う。ここだけ見ると、指標として書いてあって、3 分の 1 程度しかないことを考えると、「やや評価できる」か「やや評価できない」という評価委員としてはそうしないと、意味がないのではないか。県民の皆様から指摘されないかという気がする。「評価できる」はちょっとやりすぎではというのが私の印象だ。

委員 C
賛成だ。やや評価できるが妥当ではないか。

委員 D
評価基準は二つなのだが、その前段として、無事に保管しているということはクリアされてる。そういう意味で言うと、3 つの項目のうち 1 つが NG であるということになり、「やや評価できる」、「ややできない」のどちらかであるが、「やや評価できる」ではないかと考える。

委員 A
事情は理解できるのだが、数値目標が数値として出ているので、「やや」になるのではないか。

委員長
では委員会の評価としても「やや評価できる」としたい。常設展示の方をお願いする。

学芸課長
評価指標のうち一つが特集展示という常設展示室の中で、新しいテーマで行うものである。一つは米作りのところで野良仕事の衣類を新たに展示した。またヒスイが県の石に指定されたことにちなんで、ヒスイの展示を行った。以上の 2 点で目標をクリアした。ワンポイント解説は土日に研究員が展示室でテーマを絞って解説を行っている。目標 500 人に対して 679 人の参加者があり、クリアしている。機器更新は思うように進んでいないが、「評価できる」とした

委員 D
指標はクリアしているので、「評価できる」でよいのではないか。

委員長
指標に反映できていない、されていないところで、委員会として何か触れておきたいことはあるか。

委員 B
アプリでの常設展解説がされているが、それはどこに入るのか。

学芸課長
今の評価項目では想定されていない。

委員 B
実際の利用度はどうか。

学芸課長
もともと音声ガイドがあったが、それがだいぶ老朽化して、新しいシステムを導入した。不具合もあるので、十分に活用できていないところもあり、QR コードの解説も取り入れている。

委員 B
老朽化しているものも使えるようになっているのか。

学芸課長
そうである。機器の修繕ができなくなっていて、300 台あったのが、今は、使えるのは 200 台ぐらいになっている。

委員 A
アプリの不具合というのはどういうものか。

学芸課長
Wifi がキャリアによってうまく受信できないという報告を受けている。

委員 B
試行錯誤で、改良しようとしているということか。

学芸課長
そうである。QR コードによる解説や使いやすさを探っている状況である。

委員 B
音声ガイドも昔は借りていたのが、アプリで QR コードで買ってくださいという美術館などがある。この館については先進的だと感じていた。まだ、試行錯誤が必要ということか。

学芸課長
そうである。

委員長

やはり来館者の年齢層によってはアプリはなじまないかもしれない。
ワンポイント解説は全部で 84 回されていて、平均参加人数も従来通りぐらいのようだ。解説は何人ぐらいで行っているか。

学芸課長
研究員 11 名である。そのほか、外部からのゲスト解説をコロナ前は行っていた。

委員 A
実績 670 人のうち常連はどのくらいいるのか。

学芸課長
毎週来る方は 3， 4 人いらっしゃる。

委員長
指標もクリアして、評価できるということでよいか。
次に、企画展の方に移る。

学芸課長
企画展は 2 回、春と秋に行った。春は巡回展で浮世絵とそこに登場する風俗を実際に突き合わせてみていただくものだった。秋は自主企画で生業絵巻尽で、いろいろな絵巻から生業がテーマとなっているものを集めた。テーマ展としては、一つは新発田市から預かっている資料を使った、冬は県内の他館とリレーで展示を行った大河津分水の展示であった。そのほか企画展示室を利用した事業があった。目標 7 に対して 9 回ということで目標を上回った。満足度に関しても数値をクリアした。
評価としては「評価できる」とした。

委員 C
企画展示室実績というのは企画展 2 回とテーマ展 2 回に加えて、マイコレクション、kid’s コレクション、原田泰司展か。

学芸課長
Kid’s がふたつあり、ふるさとなみえ美術館をくわえて 9 である。 1 時期に併行して実施しているものもある。

委員 C
テーマ展示の人数はわかるか。

学芸課長
常設展の人数ということにしている。

委員 C
一日 100 人前後だか、これをどう評価しているか。

学芸課長
目標に掲げている人数からはだいぶ少ない。

委員 C
もうすこし入ってもよいという印象がある。

副委員長
昨年と数字が同じである。数字を直してない可能性がある。

学芸課長
春の浮世絵の方は 5,509 人である。秋は 3,350 人で、開催日数は同じである。

委員 C
稼働日数はどうカウントしているか。

学芸課長
実際に一般公開している日数である。

委員 C
準備の日数は入るか

学芸課長
入らない。

事務局
この数値は去年の検討会でお尋ねがあったので今回新たに入れた。

委員長
どちらも人数が訂正になったが、やはり、入ってほしい人数には届かなかったということか。

学芸課長
そうである。

委員 C
指標を 2 つともクリアしており、稼働日数もかなりがんばっているので、「評価できる」でよいのではないか。

（委員同意）

委員長
生業絵巻は何年くらいの研究成果なのか

学芸課長
担当者がかなり長年行ってきた研究の成果であった。科研の成果も入れているが、玄人向けだったかもしれない。

委員長
そこは県民の意見を言う我々としても難しいところがある。研究の成果を展示に還元するのは理想的であるが、それが独りよがりではいけない。自分は見られなかったが、ほかの委員の意見は？

委員 C
大変良かった

委員 B
自分も大変面白かった。佐渡欽銀山だけでなく、鯨捕獲の絵もあり、金銀山絵巻の時代の作品の流れしか知らなかったのだが、いろいろ繋がってくる。当時の人々の生活を知ろうとした人がいたことがわかって面白かった。ビジュアル的に絵だからとっつきやすいのかなとは思ったのだが、そこが集客に繋がらなかったのは、やはり何かしらもう少し見せる努力は必要だったのかもしれない。
ただ、満足度は高かったと思う。

委員長
タイトルもあるかもしれない。以前のお菓子はすごく入ったと聞く。やはり身近だから、みんな感じやすい。

事務局
それに加えて企画展料金が違うというところがある。ついでに見ていこうというお客さんが結局入らないということになっている。企画展料金を払った人だけを見るということなので、ついでに見ていった人が、思ったより面白かったという感想を持つことがない。

委員 C
ものすごく暗くしてある展示がある。災害展でも暗すぎて、これでは来ないという気がした。
]
委員長
何か描き起こしとかがあると、それを見てから見ると何となく見えてくるような気がする。

委員 B
ジレンマだと思うが、浮世絵は集客を望めるということで展示していると思う。一方で年配者が来ると、見づらいというお客様も増えてきている。かといって照度を上げればよいかというと保存の問題が出てくる。

学芸課長
浮世絵の展示が多くなって理由の一つは、開催経費が安いということもある。

委員 A
例えば何時から何時まで、たとえば 10 時から 11 時まで明るくするということはできないか。

事務局
積算照度なので、できることはできるのだが、展示期間を短くしなくてはならない

委員長
ヨーロッパでは、絵にカーテンがかけてあり、見たいときだけ見るようになっていることがある。

委員 C
苦痛になってくる。見えないといらいらしてくる。博物館浴でリラックス効果があるという話題が取り上げられていたが、逆効果だ。

委員 B
今回は文字の情報量が多かった。オーディオガイドがあって浮世絵だけを見るのならばよかったのかもしれない。

委員 A
画面で明るい画像が見られて、実物を見ることもできるといいのかもしれない。

学芸課長
明るいものをみてしまうと、次に暗いものを見るときに目が慣れないことがある。

委員長
巡回展の場合は、実行委員会にだれかが入っているのか

学芸課長
買取企画なので、入っていない。

委員長
大体パターンとして、一つは買取企画のパッケージで、一つはできれば自主企画になるか。

学芸課長
開催経費を見ると、自主企画を 2 回入れるのが難しい。安い買取企画を入れて自主企画を確保しようとしている。

委員長
他にテーマ展示はいわゆる自主企画でお金をかけないということだ。
評価について異存はないが、2 月 3 月の細かな展示を分散できなかったのかと思う。おなじ料金で見られる人見られない人が出てしまうし、分散できるともう少し稼働日数もあがったのではないか。
外部の調整のできないところがあるというのは承知はする。見たときに雑多な感じを受けて、もったいないというか、一つ一つの事業が軽くなっている気がする。総合的には評価できるということにしたい。
次に調査研究の説明をおねがいする。

学芸課長
評価指数は 3 点ある。外部研究費取得については目標 6 に対して、分担を含めて 12 件であった。学会発表件数も１１回に対して１５回でこれもクリアしている。論文等執筆については５５にたいして 39 と目標を下回ってしまっている。これまでの蓄積をもとに執筆をしているが、今までのように調査に出向けなかったことも影響していると考えられる。目標に達しなかったのだが、自己評価としては「評価できる」とした。

委員長
論文などの執筆は論考だけでないと思うが、展覧会があると数が増えるとか、準備で数が増えないということがあるか。

学芸課長
企画展で手が回らないということはある。

委員長
自分については他人に直接迷惑がかからないので、後回しにしやすいものになってしまう。そのあたりの研究時間を確保することの難しさはあるか。

学芸課長
人数が減って、毎年企画展を担当せねばならず、資料整理作業を含めて時間がとりにくくなっている。

委員長
論文数は毎年クリアが難しいようだが。

学芸課長
目標が高すぎるという意見もある。

委員 B
雑誌媒体のものも含まれているのか。雑誌自体が減っている。

学芸課長
まとめてコラム連載というのがなかった。また最近日報の文化欄に載せてもらえる機会も減っている。

委員 C
論文執筆件数が目標に達していない。それにもかかわらず評価できるとした最もアピールしたいことは何か。

学芸課長
他の機関にくらべ外部研究費の取得が非常に多いと考えている。大学などに比べて遜色ないかと思う。

副委員長
過去の実績を見ても外部研究費については目標をあげてもよいのではないか。

学芸課長
これは 5 か年計画の数値を示している。今後見直しの可能性はある。

館長
次年度からも同じである。

委員長
現在学芸員は何名であったか。

学芸課長
これまで 11 名で、この春から 10 名である。

委員 A
昨年度は「やや評価できる」であり、あまり数値が変わっていないが、今年度は「評価できる」にしたのはなぜか。

学芸課長
やや自己評価が低いのではという指摘もあった。

委員 B
ネット上で書いたものは含まれているのか。紙媒体だけか。

学芸課長
紙媒体だけである。

委員 B
今後も紙媒体でないとならないというのは指標として重要なのか。

学芸課長
将来的には変わるかもしれない。

委員長
今回ネットで書かれたものは除外されているのか。

事務局
各研究員が業績を書き込んでいくが、そこには入っていなかったと思う。

委員長
次回も目標値は 55 件ということだが、オンラインのみのものも加えていくことがよいのではないかと思う。

委員 B
内訳がもう少しわかりやすいとよい。

委員長
評価委員会としてはどうするか。

委員 C
このままでよいのではないか。

委員長
自己評価通りとする。その理由として、学芸の限られた人員の中で成果を上げているということだ。

委員 D
外部研究費の取得件数もプラス理由としてよいだろう。

委員 A
外部研究費申請にはかなりのボリュームのある作業が必要なのか。

学芸課長
しっかりした研究計画が必要である。

委員長
大学博物館では展示が業績にカウントされない。この博物館の場合は展覧会も業績だと思う。昨年度は図録は出版されたか。

学芸課長
生業尽は刊行した。そのほか令和 3 年度のテーマ展のデジタル版図録がある。

事務局
図録は論文等にカウントしている。

委員長
では学校教育にうつる。

経営企画課長
1つ目の指標が県内小学校利用率で県内小学校440校のうち、目標35%に対して、実績28%であった。学校の統廃合が進んでおり、また、ひきつづき新型コロナの影響があった。県外からの小中学校の利用が増加し、学校団体全体としては3年度に比べ 1,000 人ほど多かった。 2つ目の体験活動の新規プログラム数については記載の2種類を新プログラムとして実施した。 3番目、体験プログラム満足度については感染対策に留意しながら、新プログラムを実施するなどして100%ということだった。指標ではないが、（4）と（5）に記載の通り、勾玉作りなど出前授業を7回行い、高校生アカデミックインターンシップを3名受け入れた。団体対応について、広報の職員が減となった影響で、受け入れに制限が出ているが、満足度向上に努めるとともに広報にも努めていきたい。
学校の利用率が目標に及ばなかったので、やや評価できるとした。

委員C
小学校利用率はどのように計算しているか。

経営企画課長
来館小学校数を県内小学校数で割っている。県外については人数のみである。

委員長
修学旅行は4年度も引き続き比較的多かったのか。県内もしくは隣県という流れは続いているか。

経営企画課長
通常は会津や佐渡ということも多いが、まだ県内や県外の近いところという傾向はあったと思う。

委員B
今年度から戻っているという印象か、23%というのが平均値になってきていると考えているか。

経営企画課長
傾向としては戻ってきて、4年度ほどではないと思うが、どのくらい上がっていくかはまだわからない。また、体制として対応が5名から4名となったので、受け入れの調整が必要になっていて、対応できないケースも出てきている。

副委員長
働き方改革などもあり、例年通りでなくシェイプアップしていこうとする考え方が最近ある。魚沼の方でいうと、ここまでバスで来て帰るのがかなりのロスである。新しく十日町にいい施設ができたのでそちらで代替しようという学校が少なからず増えてくると、この数値が上がるのは厳しいかという印象を受ける。その中では頑張っているように思う。

委員長
では評価はどうするか。

委員C
評価できるでよいのではないか。

委員D
コロナ禍の中で努力をしている。

委員長
評価できるとする。

次は社会教育だ。

経営企画課長
指標は３つになる。出前講座の満足度であるが、県内 11 市町村で 22 回行い、543 人の参加があった。目標 90%に対し 93%で上回っている。２つ目は館員講座の満足度で 36 回実施し、771 人の参加、目標 90%に対して 96%ということで、目標を上回っている。三番目のボランティアの活動延べ人数については、目標 500 人に対して 258 人であった。活動内容は（4）にある。感染症対策のため従来行っていた企画展監視業務など一部行わなかった。中学生ボランティアに関しては、2 人参加があり夏休み中に縄文展示の解説をしてもらった。ボランティアについては今年度からは中止していた活動を再開していく。自己評価はボランティアの延べ人数が下回ったが、感染防止のためやむを得ないことであったので、全体としては評価できるとした。

委員長
ボランティアについてクリアできなかったのは説明の通りだ。３年度に比べると増えていないようだ。

委員 D
今は増やせという方がおかしいのではないか。

委員長
評価できるでよいかと思う。理由もそれでよいだろう。
次に学術面の連携をお願いする。

学芸課長
地域史研究ネットワークの事業数は目標２件で実績２件であった。１つは毎年行っている IPM 研修をネットワークを通じて参加している市町村に声をかけて参加してもらい知識を深めてもらうものである。もう一つは新潟県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会が当館を会場に行われ、それを後援した。展示協力としては目標数値を挙げていないが、前年度同様引き続き行っており、今後も様々な機関と連携していきたい。目標通りであるので、評価できるとした。

委員長
資料に博物館実習の受け入れ人数が加えられた。

学芸課長
定員が 15 名なのだが、７名で少し少ない

委員長
美術館でも、最近減ってきていると聞いている。なかなかなれない職業となるとしり込みする人もいるかもしれない。

委員 D
聞き漏らしたかもしれないが、3 年度実績が 1 件で、４年度は 2 件というのは何が増えたか。

学芸課長
高等学校の研究会があり、その研究集会を当館で行った。

委員 B
会場を貸してただ見学に来たではなくてということか。

学芸課長
東大の史料編纂所から、越後国郡絵図という出版物を大量にいただいたので、それを教材にして、授業の研究を行い、その後使った教材を配ることをした。

委員 B
自分の職場で研究部会があるが、ただ見学に来たというよりはもっと深いということか。

学芸課長
そうである。講師も当館から一人出て、上越、高専からも出て、絵図の見方など含め講義した。

委員 B
実績としてはすごく良いことだと思う。

委員長
ネットワークニュースの発行月 1 回とあるがどのような方法か。

学芸課長
電子メールで配信している。また紀要の巻末に 1 年分を掲載している。
1 年間分の新潟に関する文献がそれを見ればわかることを目指している。

委員 B
移動展は何か。

学芸課長
高校生アカデミーインターンシップの成果を学校で展示した。

委員長
評価できるとしたい。
次は地域連携の方へお願いする。

経営企画課長
目標は 15 件に対して、実績は下回ってしまった。評価については実績できるとした。繰り返しになってしまうが、制約があったなかで、できる限り連携に取り組んできたということで評価できるとした。

委員長
これについては指標が一つだけなので、難しいが、コロナ禍中でも開催できるものは何とかしたということだ。

委員 C
実績 9 というのはどれか。

経営企画課長
まず友の会主催展覧会が 3 つで、それと映画上映会が 1 つある。（2）のワークショップが 1 つで、（4）の信濃川火焔街道連携協議会というのは、夏のテーマ展示の時に併設して開催された火焔街道２０２２夏という展示を行った。関原町サイノカミ有志の会は冬のサイノカミ、Kid’s 考古学研究所については新聞の巡回展研究作品展、歴史研究会について古地図の研究会があった。

事務局
関係団体数として数えている。

委員 C
昨年度は実績 8 で評価はどうだったか。

委員長
やや評価できるだった。
今回については評価できるとする。

経営企画課長
情報発信について、繰り返しになるが人員が一人減り、交流活動のセクションが同じく情報発信を行っている。評価指標が 2 つあり、1 つめが新聞、雑誌、テレビに出している件数で、実績を見ていただく通り、いずれも目標を上回ることができた。だんだんと自粛自粛から平時に戻していく動きが出てきていて、広報を打てるようになってきた。もう 1 つがホームページへのアクセス件数ということで、こちらも目標を上回ることができた。3 年度はもっと多いが、これは世界ふしぎ発見で当館が取り上げられて結構アクセス数が増えたことがあって、4 年度は平常ベースと考えている。インターネット関連では SNS の活用をかなりがんばっている。実績を下の方に記載しているが、1 日 1 件は投稿するようにしており、件数、フォロワー数ともに増加している。内容については単なるイベントや展覧会の告知にとどまらず、学芸員の活動や面白いネタを取り上げ、動画も使い当館に興味を持ってもらえるような発信に努めている。これが実績につながっていると思う。いずれも指標を上回っており、評価できるとした。

委員 D
実績を積んでいて評価できるでいいと思う。SNS についても、積極的でフォロワーも増えているし、内容もよろしいと思う。

委員長
ホームページのアクセス数は、あまり変わらないようだ。他館との比較もできるのか、今まで思いいたらなかったが、評価としては評価できるでよいと思う。

委員 D
確認だが広報担当者の数が減ったのか。

経営企画課長
２年度までは広報要務を担当する職員がいたが、３年度からは教員籍で学校の対応をしながら、合間に一生懸命活動している。

委員長
総括をお願いする。

副館長
総括については指標として利用者数と満足度の 2 つがある。利用者数については目標は増加させるで、令和 4 年度の実施では、利用者総数、観覧者数も令和 3 年より増加している。ただ新型コロナウイルス感染拡大以前の令和元年度でみると利用者数で約半数の減と観覧者数で 7 割強の数字になっているのが実態とである。一方で満足度については、目標が維持向上であり、一つの項目で、令和 3 年度より低くなっているものもあるが、概ね昨年なみの高い数字となっている。
分析のところで書いたように観覧者数、学校団体来館者数については増加傾向が見られる。また満足度も高い水準を

維持できていることから、今後の回復を期待している。また、令和 4 年度では、科研遣費の増とか、フォロワー数の獲得が成果として挙げられる。感染症拡大前に比べればまだ厳しい状況にはなっているが、単年度で令和 3 年度にくらべ増加していること、満足度が目標に近い数値で維持できているところも加味して、やや評価できるとしている。

委員長
マイナスポイントとしては、3 年度よりはいいけれども、そもそもの全体的な目標には達していないということだ。

委員 C
個別の評価が収集保管を除いて全部評価できるになっているのにもかかわらず、総括がやや評価できるというのはどうなのか。

委員 A
コロナ禍のさまざまな影響が残っていることを考えると評価できるでもよいのではないか。

委員長
委員会としては評価できるでよいか。この間いろいろ試行錯誤したことが実になっているのではないか。この何年も情報発信が充実して特に SNS は、他館の追随を許さないというと言い過ぎかもしれないが、非常に積極的に行われていてけど、内容も工夫されていて、評価委員会でも評価している。それがどう結びついているか知りたいところだ、どんな施設でも評価するのは難しいだろうが。

経営企画課長
印象でいえば、こうしたから必ずこういう結果になるということにはならない。興味を持ってもらうということでは有効な媒体だと思う。いまはそういう観点で頑張ってもらっている。

委員長
ツイッターなどは本当に楽しくて、博物館の敷居を下げる効果があるのかなと感覚的にはとらえている。
前回、アンケートが話題にならなかったか。

委員 C
出口でのアンケートだけで満足度が測れるのかという話をした。

委員 A
通信設備を使ってアンケートに答えてもらうのはという話もあった。

山本委員
QR コードでグーグルフォームを使ったやり方がある。

委員 B
国立科博で来館記念のはがきにアンケートフォームにいく QR コードがつけてあった。

委員 A
チケットの半券に QR コードをつけてフォローしてもらうことはしているか。

経営企画課長
広報媒体にはついているが、これから研究してみたい。

委員長
観覧料の徴収方法が変化して、それについてどのように見ているか。
先ほど話題になっていたように企画展の観覧者数が伸びない一つの理由として、1 枚のチケットで両方みられるわけでないことがあると聞いた。

事務局
導入前との比較をすると企画展を開催しているときに企画展を見る人の数が 10 ポイントは下がっている。売り上げは変わらないと思う。分けたからといって収入がアップしていないという試算である。企画展をやっているのを知らないで来たお客さんもたとえば 200 円プラスすれば見れますということで企画展を見ていく方が結構多かったのではないかということを示しているようだ。

委員 A
目的であった観覧料増加には繋がっていないということか。

事務局
そのようには見えない。

委員長
今の資料にはないが、やはりそれは一つの大きなテーマなのでコメントでふれられればと思う。

（委員間での執筆分担協議）

委員長
これで議事を終了する。

館長
本当に真摯にかつ深く洞察いただき感謝申し上げる。初めて参加したが、今の話を聞いただけでも大いに参考になり、また自分が来たばかりで感じたことを委員の皆さんも同様に感じているということもあったので、少し自信を深めたところもあった。これから最終の答申をいただくということであり、今後もよろしくお願いしたい。新しい基準においても、また新しい見方も加え、ぜひ忌憚のない意見をいただきたい。

事務局
日程については後日調整したい。これで閉会とする。